
大陸の覇者

熱悟

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大陸の覇者

【Nコード】

N8310D

【作者名】

熱悟

【あらすじ】

時は石炭紀。三億年前に地球上に存在したと言われる大陸・パンゲア。そこには人どころか、恐竜すら存在しなかったと言われている。だが！歴史に名を刻むことすらできずに戦い続けた英雄たちが、その大陸にいた。北の村に住む少年シンが、パンゲア大陸を揺るがす！

序章：白銀の地方

今これを見ているあなた。あなたは、約3億年前に存在したとされる大陸「パンゲア」をご存知だろうか。命名はウエーゲナー。北半分をローラシア、南半分はゴンドワナ。その大陸が分裂を繰り返し、今のようなものになったとか。

もちろん3億年も前だから、人間はもちろん、恐竜もまだ存在しないと皆言う。

だが、もしもその人類の歴史じたいが間違っているとしたら……

どうなると思いますか？

序章・白銀の地方

「む……」

今から約3億年前の早朝、その男は目覚めた。

木でできたボロいベットのの上に敷かれた、布にただ羽を詰めただけの手作りの布団を

下からバツサリひっくり返し、男は頭をボリボリかく。

外は一面雪景色。その小さな小屋の窓の下あたりまで積もっている。男はその寒いなか薄着で、動物の皮のようなものを一枚着ているだけ。

男は立ち上がる前にのびをし、そのまましばらく沈黙。

朝のきざしが気持ちよくすぐ隣の窓からさしこんでまぶしい。これならすぐ雪も溶けるだろう。

男は一度外を見て、また前に向きなおした。外の様子を確認したんだろう。

そしてまた布団をかぶり、寝る。しかし、どうやらもう眠ることはできないようだ。

「お~~~~い！ 起きろ~~~~シン！」

その大きな声とともに、パンパンと手を叩くような音がやかましく聞こえてきた。

しかし、シンと呼ばれたその男は、それを無視して「ん〜」とうめきながら寝返りをうつ。

だが、渋い声はもうすぐそこまで近づいてきていた。

「おいこら！ おきろシン！」

バンツ！ と窓を叩かれた。シンのベットは窓のすぐ隣で隣接しているため、

その音はさらにうるさく聞こえてくる。いくら耳をふさいでも耳の奥まで入り込んでくる

その渋い男の声と、窓をバンバンと叩く音に、もう我慢できないシンは、ついに耐えかねて

勢いよくベットを飛び起きた。

「だあー！！ うるせえ！ なんだよ親父！ 朝からうるっせーんだよ！」

「うるさくねえ！ さつさと出てこないと、窓を叩き割るぞ！」

激しい交渉の末、シンは遂に小屋を出た。

「やっと起きたか、我が息子よ！」

「せーな……もう起きてはいたんだよ……」

「ベットに入ってたら、起きてるうちにはいらん！」

いつの時代の親父だかわからないセリフ……まあ、3億年前だが。この時代に人間は存在した。なに？ なぜその歴史が残っていないのかって？

ふふふ……それは謎さ……。

「今日が何の日かわかってんのか！」

「母さんの命日だろ？」

目ヤニをつけたままの顔で、シンはボサボサの髪をかきながら平然と言う。

父は怒った様子で喋り続ける。

「そうだ！ すぐに母さんの墓に行くぞ！」

そのままシンは父に後頭部をつかまれ、無理やり雪の中を引きずられて行った。

静かな墓地で、線香の匂いがするなか、シンとその父は両手を合わせ、目をつむって立っていた。

「母さん……」

静寂のなかで、シンの声が妙に大きく聞こえ、印象に残った。

「親父……俺、王国を……グレイル王国を許さねえぜ……」

シンは目を薄くあげ、言う。父は黙ったままだ。

シンの母・シーヌは、南のゴンドワナにある、グレイル王国に殺された。

去年の冬、グレイル王国は突如北のローラシア全域に攻め入ってきた。ゴンドワナの半分

を占めるグレイル王国も、流石にローラシア全てを制圧する軍事力はない。

だからグレイルは、まずローラシアで最もグレイルに近く、そして小さい地

イスラを攻めた。

そう、そこが、シンの住む場所なのである。

グレイル王国に攻められ、その一軍隊にシーヌは殺された。今日がその命日なのだ。

「親父……俺、決めたよ」

「む……何だ？」

そのあと少しもったいぶって、またシンは口を開いた。

「俺……そろそろ独り立ちする……」

「なに？」

父は片目を開き、手を合わせたまま顔を歪める。
そして言う。

「なにか、思うところがあるようだな」

父は真剣な眼差しでシンに言う。手は合わせたままだ。
シンは両手を離し、そして固く拳を握り締めた。

「俺、グレール王国と戦う。母さんを殺したグレール王国を許せねえ。」

だから、俺、このイスラを抜けて、都ライルに行く。今はもう、
グレール王国と

ローラシア全ての戦争になってる。ゴンドワナのグレール以外の
国は沈黙状態とはいえ、

今は少しでもローラシアに力が必要なんだ！」

父はまた黙り込んだ。ふうと溜息をついて、しばらく黙る。
それにつられてシンも溜息。二人がともに一息ついてから、父は静かに言い出した。

「シン……お前の槍は、確かになかなかのもの。だがな……」

父はそれから少し間を置いて、続ける。

「お前が憎しみで戦う限り、その先へ進む道は開けん。よく覚えて
おけ」

父も両手を離し、墓から小屋に向かって歩き出した。

そのとき、シンには父の言葉の意味がわからなかった。だが、なんとなく心に染み、笑った。

「ああ、そうだな！ 親父！」

そう言って走りだした息子と、その隣を歩く父。それは微笑ましい光景なのか、それとも……。

この少年、シンが、後にこの大陸「パンゲア」を救う男になるのだ
った……。

第一章：都への旅立ち

「ふあゝゝ」

今となんらかわらない平凡なあくびをする非凡な少年・シン。
昨日15歳の誕生日を迎えた。

つまり、シンの誕生日に母は殺されたのだ。残酷な話である。

「おおーいシン！ 起きろゝゝ」

また今日もバンバンとやかましい窓を叩く音が間近に聞こえてくる。
シンもまた同じように寝返りをうつ。だが、次の一言でシンはバツと飛び起きた。

「お前、今日からライルに行くんだろ！？」

まずシンのまぶたがピクツと動く。そしてすぐに立ち上がった。

シンは慌てて厚めの皮の服に着替え、部屋の隅に立ててあった大槍をその太い腕で掴み、

背負う。ベットの隣の棚の上に昨日から置いてあった巾着袋を腰にしっかりとつけて、

ドアから外に飛び出した。

「はっはっは。慌てんな。飯ぐらい食ってけ、息子！」

「ああ、いただきます！」

そうとっさに言い返すとシンは、父の持っていた何だか正体もわか

らない獣の肉を一口で
口に頬張り、「じゃあな！」と言って走り去っていった。
まあ、時間も大分予定より遅れてたからしょうがない。

シンは雪道を真っ直ぐ走り続け、雪がもうあまり積もっていない下の林に駆け下り、
そしてまた元気に駆け抜ける。途中にいた動物たちもビックリのスピードだ。

坂道を下り林を抜けて、まだ田舎だが、いくらか建物のある場所に出る。まあ、
全部木の小屋だが……それでも、中に人が住む立派な家だ。

「さあてと」

シンは疲れた様子もなく、両手を振り回しながら、止まる。

「まだ朝だし、今日中にライルにつくかな……」

独り言をボヤきながら歩くシンの目に、一つの大きな小屋がとま
いや、大きな小屋じゃあ矛盾している。なんというか、まあ、他の
小屋4つ分ぐらいある
大きい建物だ。

その建物は妙に目立つ。入り口には鹿の毛皮を丸ごと使って大きな
看板。

なんかボロボロでよくわからない文字が書いてある。しかも看板の
上には鹿の頭の骨が
ドッシリと飾られている。多分、この飾りだけで鹿を一匹そのまま
使っているだろう。

両端に、鹿の手足の骨まである。全部鹿だ。

気になったシンは窓から中を覗いてみた。中は暗い。ここでシンは好奇心に負けた。

完全敗北だ。真っ暗な建物の中に、コッソリ忍び込んでしまった。

シンの胸がドキドキと高鳴り、わくわくしてくる。中には武器とか、酒とか、高価な物とか

沢山あっておもしろそうだったからだ。そのとき、暗闇の奥から、声が聞こえた。

「貴様、何をやっている」

その声に驚き、ハッと振り向いたシンの眼の先には、体の大きい、短髪の男が居た。

身長はまあ、シンより少し大きい程度だが……。

「わっ！　だ、誰だお前！」

「こっちの台詞だ。こんなところで何をしているんだ」

出てきた建物の主とおぼしき男より驚いてしまったシンだが、すぐに落ち着く。

「いや、なんか気になったからさ……」

すると男は、静かに、冷静に言う。

「用がないなら早く出て行け。早くしないと大変なことに……」

言いかけたときだった。入り口の方から、声がしたのは……。。

第二章：主従関係

「グルイド。なんだ？ その小僧は……」

入り口の影から現れたのは、髭をはやし、髪の毛が少なく、背の小さいおっさんと、

数人の兵士たちだった。

朝とはいえ、建物の中に光は一切なく、カーテンが閉められている。カーテンの両端から漏れるかすかな陽の光で、なんとか顔がわかるぐらいの明るさ。

そこで、部屋の隅にある松明に灯りがともされ、まだ薄暗いものの、まあ、話すだけなら

十分な明るさになった。灯りをつけたのは、気の利いた兵士たちだ。皆軽い鎧を装備している。

「申し訳ございません……マーゼレン様。昼食をとっている最中に侵入者が……」

すぐ、外につまみ出しますので……」

グルイドと呼ばれるその短髪野郎は、即座にシンの背後にまわる。

シンはハツとして、槍に手を当てるが、押さえられる。そこでグルイドの主らしきおやじ、

マーゼレンが何かに気がついたように言った。

「む？ 貴様、その顔……どこかで見たことがあるような……いや、それよりその槍……」

「？ ……どうかされましたか……この槍は別にそう高価な物では……」

シンは、グルイドがそう言った隙について太い腕を振り払い、大槍を片手で抜いて構えた。

するとマーゼレンがジリジリと近づいてきて、警戒するシンの手の槍をじっと見つめる。

いや、どちらかというところ「睨む」という表現の方が合うだろう。

「おい、小僧。貴様、父の名を言うてみよ」

「あ？」

たいして動揺した様子もなく、シンは槍を振りなおす。

「俺の親父……ジークだ。……なんか文句あつか」

そうカミングアウトした途端、皆が一気にシーンとした。マーゼレンの口からは、くくくと不気味な笑みが漏れる。

「お前……なに言ってるんだ。ジークと言ったら、あの『覇者』、ジーク殿か……？」

そういえばその槍も、ジーク殿の使っていた物とよく似ている……。大分古いようだがな……」

グルイドがさかさずそう言って連れ出そうとすると、シンは「は？」と言って首をかしげた。

「ちょっと待て。なんだそれ？」

「ほう、知らんのか？」

マーゼレンは、シンの様子を見ておもしろそうな顔をする。シンは状況がサッパリ読めない

というような表情だ。

「昔このパンゲア大陸全土をまわり、英才教育を受けた貴族だろうと、

民を困らせる悪名高き山賊団だろうと、誰もが恐れる猛獣だろうと、全てをたった一人で

撃ち滅ぼし、制した‘覇者’、ジークといえば、知らない者はいない」

マーゼレンの言うジークは、まるで自分の父とは全く別の人物のよう
うに思えた。

しかし、実際シンの父・ジークこそ、その‘覇者’だったのである
……。

ポカンとした表情をするシンに、マーゼレンが言う。

「とりあえず、取調べ室に来い」

呆然とするシンは、もうただただ奥の暗い部屋につれていかれるだけ
だった。

コツコツコ

ゆつくりと歩く音がする。

木の床を、ブーツで歩く男。正確には、おっさんだが……。

そのおっさんの行き先、右隣には、1人の男が立っている。グルイ
ドだ。

ということはもちろん、おっさんはマーゼレンである。

「どうでしたか？」とグルイド。

「くくく……どうやら奴は、本当にあのジークの息子らしい。あの槍、鑑定士にじっくり見させたが、偽者ではないようだった。……くくく……」

「はあ……」とグルイドは驚いたか驚いてないかよくわからない目でマーゼレンを見下ろしている。

「なにを笑っておられるのですか？」

「わからんかね？」

なにやら算段を始めたグルイドとマーゼレンの姿を、シンがこっそりと覗く。しかし、兵に

見つかり、おとなしく顔を引っ込めざるをえない。

むすっとした顔で、腕を組むシンに、「おとなしくしている」と兵の一言。

「あーあーあーあー……」

「黙れっっ!」

というシンの声を完全に無視し、話を続けていたマーゼレンたちだが、

やっとグルイドの声が聞こえてきた。

「なっ……」

そのあとすぐに「静かに!」というマーゼレンの声が飛ぶ。そしてその度に、

グルイドは謝って後ろ髪をかく。2人の会話が気になるのは当然だが、遠くて聞こえない。

シンはよく耳を澄ますが、全然聞こえない。10メートルは離れているうえに、声が小さい。聞こえないのかもしれない。

「しかしそれでは……」とグルイドの声。

「うるさい！ この私の言うことに口出しする気か！」とマーゼレン。

いったいなんだとシンの興味が余計そられる。しかしその度兵に「座れ」と言われる。

毎回毎回ことあるごとにシンが、椅子から立ち上がっているからだ。

「なあー兵士さんよー。あの花瓶の奥にあるあれ、なんだ」

と、そう言ってシンは部屋の隅にある部屋より綺麗な花を飾っている花瓶を指差す。

「ん？」と兵士がそつちに目をむけたそのときだった。「ふん！」と小さな掛け声をあげ、

シンが兵士の後頭部を殴る。兵士は、声をあげる間もなく気絶。

10メートル離れているお2人さんは、どうやら気づいていないようだ。

「……よし！」

シンは倒した兵の鎧を急いで脱がし、自分で着る。幸いなことに、その兵士は比較的小柄で、鎧はシンにピッタリだ。

もちろん、2人の会話を盗み聞きするために、護衛兵に紛れ込もう

というのだ。好奇心も、
ここまでいくと迷惑だ。

鎧兜を深く着込み、もとの皮の服が見えないように、その辺になぜ
かあった腹巻をつける。

意味はあるのだろうか。そして最後に、バレないようにその兵の槍を
持ち、堂々と歩く。

2人のすぐ近くまできたときに、すれ違いにマーゼレンが不適な笑
みを浮かべる。そして言った。

「馬鹿め」

その声を合図に、そこらじゅうからマーゼレンの兵が現れ、変装し
たシンを取り囲む。

ニヤニヤと笑うマーゼレンの前に、シンは驚いた様子であたりをキ
ョロキョロと見回している。

「くくく……お前の槍にはかなりの高値がつく。どうせお前の存在
はこの世にあまり知られて

いない。貴様を殺して、槍を売り払えば私達はおおいに得なのだ
よ！」

マーゼレンはそう言う。シンは眉間にしわを寄せ、怒った様子だ。
そのとき、丁度さっきの部屋からマーゼレンの兵の声。

「マーゼレン様！ 槍を見つけました！」

「よし！ そこで待機しておれ！ こやつを始末したら取りに行く
！」

槍も見つかってしまったらしい。敵の狙いが父の槍だと知り、
ます怒るシン。

「渡さねーぜ……！ ……親父の槍は……！！」

第三章：破られた誓い

「ふん！ 口じゃなんと言おうと、この人数相手に一人で何ができる！？ やれ！」

マーゼレンの合図で、兵たちは待つてましたとばかりにシンに一斉に襲い掛かる。

シンも勇ましく、敵兵から奪った槍を振り回す。その見事な槍さばきに、マーゼレンの兵たちはどんどん打ち倒されてゆく。

「ぐつつ……！ そんな小僧一人になにをやつておる！ さつさと片付けんか！！」

と、武器の一本も持たずに指を差すマーゼレン。周りの兵を怒鳴りちらしてはいるが、自分は

戦う気はないらしい。まあ、一応君主のようだから仕方あるまい。

「グルイド！ 何しとる！ お前もさつさで行け！」

「はあ……、しかし、一人相手にこの人数では……」

「うるさい！ わしに口答えする気か！！」

そう言つて、嫌がるグルイドも無理やり行かせる。

そのグルイドの様子を察したシンは、兵を蹴散らしながらズンズンとグルイドの方にむかう。

マーゼレンはサツと大柄なグルイドの後ろに隠れ、「やれ」と小声で合図する。

「かあつ！」

シンが遂にグルイドの目の兵を一突きし、殺した。そして、グルイドの前で足をとめる。

周囲の兵は、ビビッて後ずさりしている。兵の訓練はなっていないようだ。

二人のにらみ合い。まあ、グルイドの方は汗を額から流し、あまりその気じゃないようだが……。

「いくぞ！」

「こ、こい！」

シンはグルイドに打ちかかる。何度も打ち合っているが、決着がつかない。

ガンガンと槍と剣のぶつかる音がたえない。周りの兵も魅入っている。しかし、どこか雑な

戦い方の二人。打ち合いながら、シンが言う。

「なんでそんな奴の下についてんだ」

「お前には関係ないっ！」

シンが何を言ってもグルイドは聞く耳を持たない。

しかし、絶対にグルイドは悪い奴には見えない。そう確信したシンは、まだ戦いながら話を続ける。

「なんか恩でもあんのかよ!？」

「うるさいっ！」

「これ以上尽くす必要があるっつつのか!??」

「黙れえええ！」

シンの言葉が逆鱗に触れたのか、その一瞬でグルイドが怒り出し、気合をこめた一撃。

剣を力強く横に振り、シンの……いや、シンが敵兵から奪った槍が折られてしまった。

「このボ口槍……！」と、槍を非難するシン。それに、剣を振り回して言う。

「終わりだな……」

そういいながら、グルイドの目はだんだん悪魔のようになってゆく。心を鬼にしようとしているのだ。

「いいのかよっ、そんな奴のために……」

「黙れと言っている！」

そう怒鳴ってグルイドが最後の一撃を振り下ろそうとしたときだった。

ドスッ……と音が鳴り、辺りは静まり返る。見ればなんと、シンがグルイドの大きく開いた股に、強烈な膝蹴りを入れたのだ。

「ぶぐう……」と声を出し、剣を落として崩れるグルイドに見かねたマーゼレンだが……。

「もうよい！ グルイド！」

マーゼレンのやかましい怒声が建物中に響いた。その真横には、重そうな沢山の鎧兜に身を包んだ巨大な兵。

「ぐふう……、マーゼレン……様……？」

「もうよいと言っている！ さっき、援軍を要請したところ、ガキ一人なら十分だと、

この重装兵を一人よこしていただいた！」

「ちっ」と、シンも舌打ち。グルイドは、まずそんな顔をしている。

「この男一人で將軍レベルの力をお持ちになるらしい！ もはやお前に勝ち目はない！」

マーゼレンが言った瞬間、その重騎士がシンに襲い掛かった。しかし、あまりに大振りで、

シンはあっさり避ける。だが、いくら避けようと、武器を持たないシンに、この重騎士は倒せない。

さっきのように、金的を入れることもできないのだ。

「クソ……！」

シンはすかさず兵の死体から槍を奪い、襲い掛かる。だが、固い鎧に傷ひとつつけることもできず、その槍もまた折れてしまった。

「ははは！ そんな非力な一撃では、傷ひとつつかんぞ！」

重騎士は、大槍を振り回しながら怒鳴る。そしてシンが疲れて、もう動けなくなつたところで、

重い一撃をはなった。そのときだった。

「受け取れ！ シンとやら！」

その声が聞こえた瞬間、シンの方に一本の大槍が飛んできた。

グルグルと回りながら飛んできた槍はジークの…… もとい、シンの

槍である。

そして投げたのは……………兵士グルイド。

「なっ……………!？」

「!……………お前！」

シンは驚いたが、迷わずその槍を受け取る。重いその槍を片手でキヤッチしたとき、

シンの腕が以外に筋肉質だったことがわかる。

一瞬驚いた重騎士だが、自分の一撃の威力に任せ、一撃。しかし、体重をめいっぱいにかけた

そのすさまじい一撃を、シンは槍を片手で持ち、見事に受け止めた。

「へへっ……………持つだけで気合が入るぜ！」

「なにっ……………」

「オルアー! 死にやがれええ！」

次の瞬間シンが放った一撃は、驚くほど強く、重騎士の鎧を砕き肉体を切り裂いた。

騎士は叫び声をあげ、胸から下腹部にかけて血を噴出し、倒れた。

これは確実に死んだ。

実際先ほどの雑兵の槍は、結構強い槍だった。その槍でも傷ひとつつけられなかった鎧を、

父ジークから受け継いだ槍は切り裂いた。ちなみにシンの大槍は、横にも刃がついていて、

突くことも斬ることもできる赤い槍である。

ドシャツと音がし、倒れた重騎士の後ろには、さっきまでずっと隠れていた腰抜けが立っていた。

あわわと本当に腰が抜けかけたが、頑張っ立っている状態のおっ

さんマーゼレンである。

「な、何故だグルイド！ わしから受けた恩を忘れたか！！」

おっさんは必死だ。しかしグルイドはもう忘れたという顔だ。

「恩……？ いったいどういう……」

「身寄りのない俺を……拾ってもらった」

「そんだけか？ つまんねえなあ……」

マーゼレンは見誤った。グルイドは忠義の士だ。だが、同時に正義の心を持つ。

こんな暴君に、最後までついてくるわけがなかったのだ。

「く、くそっ……！ くそっ……！！」

そう言つてマーゼレンは奥へ走り出した。「あ、待て！」とシンは右手を前に出す。

しかしグルイドはそれを止める。

「あいつをほつといていいのかよ！？」

「まあ、待て。……俺は奴の兵器と化した化け物の存在を知っている……」

今は逃げた方が……」

グルイドがそう言ったときだ。奥から大きな音がして、建物が崩れだした。

グオオオオオオオオオオ

大きなうめき声のようなものが聞こえ、建物内に振動がなる。同時にガラガラと崩れだし、天井からは粉のようなものが降ってくる。

「な、なんだ!？」

「まずい! 奴の最終兵器、それは……」

グラグラとゆれる廊下で、ほとんどの兵士は逃げ出していた。グルイドが話している途中、より大きく揺れて口を閉じる。やがて奥から現れたものは……。

「竜だ!!」

叫び声と同時にその生物は姿を現す。

硬い鱗におおわれて、真つ黒で巨大な体に大きな翼をはやす。

尾は長く、巨大な鞭のように扱ってそこらじゅうの残兵たちをなぎ払っている。

辺りはまがましいオーラに包まれ、兵たちは一目散に逃げ出す。

「な……!?!? なんだありゃあ!?!」

飛んでくる石から顔を守りながら、シンが必死に叫ぶ。グルイドも、竜に背中を向け、顔や急所を守りながら言う。

「あれはマーゼレンがグレール王国の王・レイスから貰い受けた兵器、『腐竜』!

その存在を知る者は、グレールの一部の人間のみ! 私もマーゼレンの護衛隊長として、

秘密裏にその存在を明かされた!」

グルイドが説明し終えたころには、巨大な腐竜の全貌が明らかになる。

目は不気味に白い。その頭から首を伝って見てみると、その上に偉そうに立っているのは、

マーゼレンだ。

「グルイド！ 何故だ！！ 何故わしを裏切った！！ 恩を忘れたか！！！」

腐竜の上から、腕を組むマーゼレンが怒鳴る。きっと今、外も大騒ぎしていることだろう。

ここはまだ建物の中で、壁はかるうじて大破していない。しかし、腐竜の体の後ろの方は、建物を突き破っている。一体どこにいたのだろう。

「マーゼレン！ 貴様にはもはや、恩など果たす義理はない！ 貴様の行動は、

民からの税で遊び、目が合っただけで村民を殺し、己は豪遊の限りを尽くす暴君！！

私が入ったときの面影など、もうどこにもないのだ！！」

グルイドは、今まで思っていたことをすべて吐き出した。この状況下で、勇ましい限りだ。

「ふん！ 状況をわきまえてはざくがいい！ 殺せ、『腐竜』！！」

くる！ と思って2人が身構えたときだった。

腐竜が暴れだした。丁度腐竜の脈のあたりにのしかかっていたマーゼレンを、腐竜はうっとおしく

思っただけだ。

「なっ！？ …… やめろ！ し、死にたくないいいいい！！」

そう虚しく叫びながら、マーゼレンは振り落とされて、その巨大な足に踏み潰された。

足の下からは、哀れなおやじの骸がころがっている。

しかし、腐竜の怒りはおさまらない。まだまだ暴れる。

「くっ……、終わりか！？」

第四章：無敵の援軍（前書き）

よく考えたら……

僕は、まだ挨拶もしてませんでした。忘れてました。
はじめまして。虚人です。

第四章：無敵の援軍

「ゆけー！ 標的は竜だ！ 油断するな！！」

いきなり奥の、霧に隠れてよく見えもしないような丘の方から角笛の音が聞こえたと思ったら、

そこから次々と馬に乗った兵たちが駆け下りてきた。なに？ 3億年前に馬が居たのだった？

まあ、少し現代の馬とは違う。まあもともと現在、3億年前の人間の話が残っていないのは、

ある理由がある。その理由で当時の人間たちはいなくなり、その時馬も姿を消した。

その祖先というか、新種というかが、現在の馬になったのである。

このとき馬は、目がデメキンのように飛び出て、鬣は少なく、尻尾は短かった。そしてなにより、

牙が鋭く、口から真上にはみ出した牙がギリリと光る。

話を戻そう。なぜ丘からそんな騎馬隊がやってきたのか？ まあ、せいぜい10人程度だが。

その理由は今はわからなかった。だが、知ろうともしない。今は腐竜の攻撃を防ぐのに精一杯だったからだ。

「突撃イーーーーー！！！」

その軍のリーダーとおぼしき男が、馬上から剣を掲げ、掛け声をあげた。

そのとき軍の兵たちも一緒に声をあげ、武器を上に掲げた。

そこで先頭の2、3人の兵たちは足を止め、はじに寄る。残りの兵たちはそのまま猛スピードで駆け降りてきた。まだ目がかすんで見えないほどの距離だ。なに？ それほど遠くの、たった10人程度の兵が見えたのだった？ 質問の多いやつだ。これは単純な理由。シンはずっと山暮らし。視力はかなりのものに決まっている。まあ、それでも普通の奴じゃ絶対に見えないような距離だが、シンは普通じゃない。ただそれだけのことだった。

それと当時の馬は、現在の馬とは比べ物にならないほど速い。だから、すぐに腐竜の背後まで駆けてきた。そして、今先頭を走る若い男。さっき掛け声をあげたリーダーとおぼしき男が、大刀を振り上げ、馬を地上において腐竜の頭の高さまで飛び上がった。

「はあっ！」と掛け声をあげ、腐竜の頭上から大刀を振り下ろし、一気に腐竜を切り裂いた。と、思ったら、斬ったのは角一本だけ。竜は思いのほか素早く、頭を斬られる一瞬に首を動かし、犠牲を最小限におさえたようだ。頭がよかったのか、それともただ動いただけか。

男は馬の上に上手く着地し、大刀はそのまま地面にぶつけ、「ちっ！」と舌打ち。腐竜はうなり声をあげ、ますます暴れだす。腐竜の頭から切り落とされた角は、男のすぐ隣に落下。幸いそこに人はいない。いや、わざわざ人のいないところに計算して落としたのだろう。

なかなかできる男のようだ。シンは啞然としているが、それでも腐竜の攻撃はかわしきる。

男はまだまだ大刀を振り回し、腐竜の足に少ないながら切り傷をあてる。扱いは雑で、

我流の刀のようだ。男の後ろからも、多数の特徴的な兵たちが次々やってくる。

「な、なんだ！？ あいつらは！！」

「あの胸の印……ライル傭兵団！？」

兵たちの胸に輝く印は、白い石を加工されて作られた妙に輝くものだった。

そしてそれは、都ライルの、傭兵団の証だった。

「なんでここに……」

グルイドが言いかけたときだった。暴れる腐竜の前足がグルイドのすぐ目の前を力強く踏む。

近くの大地に強い衝撃がはしり、なかなか重いグルイドも、後ろに吹き飛ばされてしまう。

「うおっ」と小さな声をあげて後ろに倒れこむが、硬い大地にぶつかったとは思えないほど

柔らかな感触がした。顔を上げて見てみると、そこには2メートルは優にあるであろう大男が

膝立ちになり、グルイドの体を支えてくれていた。

「……大丈夫か？」

「……え、ええ……」

影でよく顔が見えなかったが、その大男は髭面で、現在の言葉で言

う『ダンディ』な顔をしていた。

だがその状況もすぐ終わり、男はグルイドを土にそつと置いて立ち上がった。そしてすぐ

むこうからリーダーの声が聞こえてきた。

「おい！ ケイト！ こつち頼む！」

「はっ！ ベグオン様！」

そう返事するとケイトという男は、隣に置いておいた大剣を手にとり、さっきの穏やかさからは想像もつかないほど俊敏に、大きな体からは想像もつかないほど早くリーダー・ベグオンのもとに駆けつけた。グルイドは、ただ呆然と座るしかなかった。

シンはそんな一団になんだか興味が湧き、じょじょにケイトに近づこうと試みるが、

腐竜の口から吐かれる暴風のような息と、腐った液体が邪魔する。

その液体は、唾液が胃液。

しかし、普通の人間のものより、物を溶かす作用が強く、あまりつけすぎると溶けてしまう。

実際、マーゼレンの兵の死体はその液体をもろに浴びて、体の半分は溶けている。シンはそれを

見てゾッとする。しかもその危険な液体が津波のように襲い掛かってくるのだから、うかつには近づけない。

「うわっつ……」

ここでまたピンチだ。シンの足に、少し腐竜の液体がかかる。靴の先がだんだん溶けてゆき、

素足に直接当たりそうになる。「わっ」と声をあげ、急いで靴をぬぐ。しかしぬいでる途中、腐竜の長い尻尾が右からとんできた。危うく尻尾に殴られて死んでいるところだ。しかし、そこで助けてくれたのがライル傭兵団である。

「はっ！」

掛け声を一言発した騎士は、長刀で尻尾を切り裂き、止めた。随分大きな馬に乗っている。まあ、縦に少し長いだけだ。騎士の後ろには大きなスペースがあり、人が座っていたような跡がある。きつとさっきの男・ケイトは、ここに乗っていたのである。

「大丈夫ですか!？」

「あ、ああ……、ありがとよ……」

シンは柄にもなくオロオロした感じで、かつ冷静に……呆然とする。グライドと同じだ。するとすぐに騎士は、走り出す。

「はっ! ご無事でなによりです! ……それでは!」

随分真面目そうな騎士だった。長刀を使う騎士という時点で珍しいが。騎士には槍を使う者が多い。

「あ! 待ってくれ!」

我にかえったシンが、慌てて騎士を呼び止める。

「なんですか？」

「あんたはいつたい何故ここに……？」

キキツと止まった騎士に、シンは慌てて質問する。すると騎士は迷わずこう答えた。

「竜に襲われる人がいたから！ 死人は最小限に抑えたかったのです！」

「あんた……、名前は……？」

シンはもうひとつ質問した。そこで少し間をあけて、騎士はこう答えた。

「ハロン……。ライル傭兵団、新人ハロンです！」

そう言うのと騎士・ハロンは走り去って行った。気が動転して、顔はよく見えなかった。

まあ、グルイドと同じだ。

そのとき、丘から大量の矢が降ってきた。しかし、何故か人間には一本も当たらない。

どうやらさつき丘に残された兵は、皆弓兵だったようだ。だいたい丘から腐竜のいる地点まで、

100メートルぐらいで案外短い。ただ霧のせいによく見えないだけ。だが、見えないのにかわりない。

そのなかを、的確に竜だけ狙い打つ。腐竜の周りには傭兵団員が沢山いる。下手をすれば

仲間にあたっていたかもしれないのを、平気で打つ。その度胸に安心したと同時に、

なんだか胸が高鳴るシン。強者の定めという奴であろうか。

「おもしれえじゃねーか!!」

シンは怒鳴り声をあげ、腐竜にむかつて行った。

ライル傭兵団には他にもいろんな強者たちがいた。巨大な斧を片手で振り回す者や、

さっきのケイトやハロンのような豪傑たち。そしてなにより注目すべきはひとりの女。

屈強な男衆に紛れて少し離れたところから遠距離攻撃。だが、武器は弓じゃない。素手から、

何も無いところから光を出し、そこから炎を飛ばしている。しかもかなり大きな炎の弾が、

かなりの速さで腐竜に襲い掛かる。頭に何発もいれられて、もうくらくだ。

「なんだありやあ!？」

シンが大きな声を出したときだった。「知らないのかい？」

と声がし、シンの真横に丁度ふりかかるところの尻尾を蹴りで吹き飛ばした。

ちなみに、腐竜の尻尾は三本ある。

「あれは『魔法』さ……」

その男は細い体で軽装。スラッと身長は180センチほどで、これまた渋い顔をしている。

「知らないのかい？」

男はもういちどシンに訊く。シンはこくこくと頷く。

「……まあ、いいか。全てにおいて、説明はあと！　まずはこいつを片付けようぜ！」

相変わらず渋く、そして熱い声でそう言うと、腰からナイフを一本取り出して、腐竜の方に駆け出した。

シンの中で、期待がどんどん膨らんでいくのがわかった……………。

第四章：無敵の援軍（後書き）

読んでくださった方、ありがとうございます。
感想や評価など、あったら待ってますので、気軽に。

第五章：腐竜撃沈

「でりゃあ！」

そのまま勢いに任せてシンは腐竜に突進。自慢の槍で腐竜の横腹を貫いた。

大きなうなり声をあげてますます暴れ狂う腐竜。シンは一步退いたが、傭兵団長・ベグオンは一步も退かない。羨ましさすら感じる。

「そろそろ沈め！！」

ベグオンは再び大刀を構え、右から左へ思い切り振った。それで今度は腐竜の足がちぎれ飛ぶ。

切り口から噴出した血の量は計り知れず、ベグオンはまともに血をかぶるが気にしない様子だ。

足を一本失いバランスを崩した腐竜は、真横に倒れこみジタバタすることしかできない。

その際に腐竜の下敷きになった者は居なかった。皆ま逆の方向から攻撃していたからだ。

「サナ！ お前は竜の右目を狙え！」

「はい！」

勇ましく返事をしたのは、さっきの魔法少女である。手先からだす不思議な光の向きを、

徐々にずらしてゆき、腐竜の眼球を狙って撃つ。

「ケイト、ハロン！ 竜の首の脈を狙え！ 鱗に何度攻撃しようが

倒すのは難しい！」

「はっつ！」

ケイト、ハロン兩名も一斉に返事をし、倒れている腐竜の首の方にむかい、走る。

ハロンはともかく、ケイトは徒歩だから巨大な腐竜の尾から首まで走るのに時間がかかると

思ったら、これが、恐ろしく足が速い。あっという間に腐竜の首まで到達し、大剣で腐竜の脈を

斬りつけた。ハロンもほぼ同時に薙刀で斬る。

「的確に弱点狙ってやがるな……。俺も行くぜ！」

シンも傭兵団の勢いに乗って走り出した。もちろん狙うは、腐竜の頭だ。

「あ、待てシン！」

グルイドも慌てて追いかける。鎧が少し重かったが、そこまでの重装備ではないので遅れはしなかった。

そのままグオンは腐竜の腹をもういちど切り裂き、決着は着いた。腐竜は息絶え、この大規模であり小規模である戦いに終止符が打たれたのである。

腐竜との戦いに決着をつけ、マーゼレンの元腹心・グルイドと確かな絆を確かめあったシン。

それと同時に、腐竜との戦いで加勢にきたライル傭兵団、計8人も接触。

ここまでで忘れてしまっている人もいるかもしれないが、シンの旅の目的は、ライルのために戦う。正確に言えば、グレール王国を撃ち滅ぼすことだ。

だから、都ライルの領主直々に雇われたライル傭兵団と出会えたのは幸運だった。

8人とは、普通の傭兵団とは比べ物にならないほど少ない。

いったいどんな傭兵団なのか、シンの中には、かなりの期待がふくらんでいた……。

シンとグルイドは、2人一緒にライルの城につれられた。

腐竜討伐に協力した者達として、そして暴君マーゼレンについての重要な参考人として。

それと、シンの願いである。戦いのあと、傭兵団員と村の皆で腐竜の死骸の後片付けをしていた

とき、ただ突っ立ってるだけのグルイドを尻目にシンがむかった先は傭兵団のリーダー・ベグオンのところだ。

「なあ！ あんた！ ライル傭兵団の団長だよな！？」

シンのムダにデカい問いかけに動じることもなく、ベグオンは指揮する指を止める。

「そうだが……」

するとすぐにシンがまた怒鳴る。

「あんたらのところに連れてってくれよ！」

「ああ、もとよりそのつもりさ」

ベグオンは肩につく程の髪をゆらして不適な笑みを浮かべる。

シンは大いに喜び、グルイドに向かって一目散に走っていった。そこでいくつか言葉を交わし、

少し打ち解けあったところで、傭兵団の3人・ベグオン、サナ、ジエイクに連れられ都ライルまで

ウ馬に乗り丸一日。寝ないでたどり着いたライル城。先ほどの田舎から、随分都会まで来たものだ。

青い壁に青い床。城主は青が好きらしい。その城主は、今奥の玉座で座っている。

といっても、まだライル城についたばかりのときは、城主は不在だった。代わりに沢山の兵が

警備していたが、少々警戒心なさすぎじゃないかと思う。

その間に傭兵団長と、その他二名とも言葉を交わす時間があった。

「あんたらあ、たった8人で傭兵団なんかやってんのか？」

「ん……まあな」

シンの問いかけにまず答えたのがベグオンである。荒々しい格好だが、優しそうな瞳をしている。

鎧は軽装。鉄の大刀を背負い、腰には傷薬やらなにやらがぐしゃぐしゃに巻かれている。

「ふう〜ん……、結構名前が通ってんだろ？ たった8人で」

「まーな。でも、お前らは2人だろう？」

「まあ、そうだけど……」

ことごとく話を終わらせてしまうのは癖かなにかだろうか。それと

も話すのは苦手なのか。

とにかくこのままでは話が進まない。グルイドは、団員の2人に目を向ける。

「あなたは……、不思議な技を使いますね」

「え？ あ、はあ……」

少し驚いたように幼い声を出したのはあの魔法少女だ。名前はサナ。長い髪で、体が小さく、まだ子供ではないかと思う。

「ああ、そうか。あんたら、『魔法』を知らないんだったな」

そこに横から口を挟んだのはジェイク。さっきのスラツと細長い短剣使い。渋い顔のあの人だ。

「ああ、さっきのおっさん」

「おっさん言うな」

そういう言葉に敏感らしく、すぐに反応した。おもしろかったが、シンはそれ以上言うのをやめる。結構そのへんのしつけはしっかりしていたようだ。

第六章：思いつき城主（前書き）

いらっしやい。

この話はちよつと前に書いて今も続いているものを丸写ししている
ものなので、だんだん文法が変わってるかもしれせん。ご了承くださいね。

第六章：思いつき城主

「まあ魔法つてのは要するに、自然の力とか神に祈りだとかなんとかで、この大陸で魔道士は
沢山いる」

ジェイクはめんどくさそうに話始める。だが何故か嫌そうではなかったたので、口を挟まず聞く。

「しかもその魔法にもいろんな種類があるとかなんとかで……ああ、よくわかんねえ。」

サナ、あと、頼む」

と、やはりめんどくさがっていたようだ。そうして無理矢理説明役を押し付け、足を崩した。

サナは軽く微笑み、ジェイクからだんだん目をシンたちに移し、話し出した。

偉く活き活きと話していた。まだ子供だからか、世話好きなのだろう。最後に歳を訊いてみた。

「16だけど……？」

聞いたときはビックリした。この時代の成人は17歳となんと中途半端な数値である。

なぜかという、もとはきりのいい15歳だったのが、それではまだ小さすぎないか？ ということで

話し合われ、15がダメなら20？ でも、それは大きすぎなんじゃ……、と。今は、考え方も大分

違うようだ。あと1歳で成人というのは、目の前の10歳ぐらいに

見える少女には想像もつかないものである。

その説明では、どうやら魔法には沢山の種類があるらしい。先ほどサナが使っていたのが『攻撃魔法』。敵にダメージをあたえることだけを目的とする

比較的使用の簡単な魔法らしい。ちなみにサナが先ほど使っていた攻撃魔法は、

『フラッシュ』という威力の低い下位魔法だ。

それと、味方の傷を癒すことを目的とした『回復魔法』。まあ名前のとおり、

仲間の傷口を塞ぎ、痛みをなくすものだ。使用の難易度は攻撃魔法と同じようなものだそうだ。

それと『特殊魔法』。もともと魔法の存在したいがシンにとっては特殊なものだったが、

その中でも更に特殊な効果を持った魔法らしい。ここは、難しくてもよくわからなかった。

と、シンが頭の中で整理し、ようやく特殊魔法以外は理解したときだった。

城門の方から声がザワザワと響く。

シンたちが振り向いて耳を澄ませば、領主が帰ってきたとかなんとか。

「……おい！ 皆！ ライル領主のレイスが帰ってきたって……」

シンが傭兵団メンバーに向かって話しかけたとき、もう皆はいなかった。どうやら傭兵団の

奴らは、城の中がざわついた時点でレイスの帰宅に気づいたらしい。

ちなみにその名前は、さつきベグオンから聞いたものである。

ライルはローラシアの三分の一をしめる土地。さつきまで居たイスラは、ローラシア地方の中でもさらに小さな地方である。もはやライルの領主は、一国の王と同じようなものだ。

グレールはひとつの国として成り立っているが、一応ライルは、ローラシアの半分、ジキルという国の中のひとつの土地にすぎない。まあ、そのひとつの土地が国の大半を占めてしまっているのだが。

そんな大きな土地の領主に会える。いや、この際地位はシンには関係なかった。

シンは、あの強いライル傭兵団をおさめる男に、彼らを雇った男に会うのが楽しみでたまらなかった……。

「やあやあ。ただいま！ 皆！」

ふざけた顔で城に侵入してきた黒髪の男。それが、ライルの領主・レイスであった。

シンは呆氣にとられた。もうちょっとこつ、渋くてカッコイイ男を期待していたからだ。

これ以上渋顔が増えても困ったものだが、シンは頭の中に、立派で威厳のある歴戦の男のような、なんかそんな奴を思い描いていた。それがコイツは、ただならで、まるで威厳のないボンボンの若者みたいなの、

なんかそんな奴であった。

グルイドもまた同じ。シンにつられて、呆氣にとられる。百聞は一見にしかずというのはこのことだ。そのことわざ自体、この時代にはないから表現のしようもない。まったく困ったものだ。

「ん、こいつらか。あの竜とやりあってたっていう……」

「ああ、そっちの槍持ってたのがシン、剣の方はグルイドだ」

そうやってベグオンは、2人の方に手を向けて言う。シンも、「ああ、どーも」ととりあえず言う。その次にすぐ、ベグオンはシンたちに雇い主を紹介した。

「で、この男が領主のレイスだ。……一応雇い主だ」

ベグオンが次にレイスの方を向いた。レイスはへらへらと笑いながら、「一応とはなんだ」なんて言っている。本当にこいつが領主か？ とシンですら思うほどの威厳のなさだった。

皆が一息ついたところで、レイスは一行を奥の広間へ案内した。玉座の間から左に出て、右に曲がって真っ直ぐ歩く。そしたらすぐに広間が見えてきた。

レイスはその中心にある大きな、いや、広間の大きさに比べたらかなり小さなテーブルに腰かけ、「どーぞ」と4人を座らせた。ちなみに今、サナとジェイクは不在である。村に残った5人を向かえに行ったのだ。

「で？ いったいなんで腐竜と戦ってたんだい？ しかもたった2人で」

急に真剣な表情になったレイスに、ただものじゃないというオーラ

を感じ取ったシンは緊張気味に答える。

「いや……俺はグレールと戦うために旅立って……、途中で暴君マ
ーゼレンに会ってだな……」

「そいつを怒らせてしまったというわけです」

シンの言い方がじれったいので、グルイドがさっさと終わらせようと口を挟む。

レイスは、「ふん……」となにやら考えだし、2人に訊いた。

「グルイド。君は行き先があるか？」

「い、いえ……。ありません……」

「シン。君はなぜライルに来たんだっけ？」

「え？ いや、母さんの仇のグレール王国を倒すため……」

「そうか……」

するとレイスはまた考え込んだ。他の3人も黙ったままである。
沈黙に耐え切れず、ベグオンが言った。

「レイス、まさか……」

ベグオンがいい終わらぬうちに、レイスは大声で言った。

「君達、ライル傭兵団に入れ！」

「は!？」

さすがのシンも驚いた。もちろん、グルイドも大声をあげた。
いきなりで話がわからない。何故そんなことを言い出すのかちゃん
と一から説明してほしい気持ちで
いっぱいだ。

「お、おい！ レイス！ どういうことだよ！？」

たまらずベグオンも口をだす。しかし動じず、レイスはニヤリと不適に笑って言った。

「行き先のないグルイドは、傭兵団に入った方がいいだろう？ 何故ならライル傭兵団は、3食だしてもらえるし、飲み水も十分に補給できる。全部雇い主に払ってもらえるちよつと他とは違う傭兵団だから」

「ま、まあそりゃ行き先ないですけど……」

グルイドは反論できない。正直、そんな条件のいい傭兵団があるとは知らなかった。

そこに入団できるなら入団したい。路頭に迷うよりましだ。

「そしてシン。ライル傭兵団は今、本格的にグレールと戦闘に入ろうとしている。君も入れば、グレールと戦うことができる。君はなかなか実力があるらしいし、加わってくればきっと、グレール本体とも渡り合えるようになるかもしれない」

「ほ、本当かよ！？」

シンは反論しない。むしろ喜んでという気持ちだ。自分がいればグレールを倒せるかもしれない。

そんな甘い言葉に乗せられたのだ。

「で、どうだ？ 君達。入るかね……」
「待てって！」

ここでやっとベグオンが口を挟んだ。

「俺の意見も聞けよ！　いいかお前ら！　俺たちはかなり危険なところとしてんだぞ！？」

わざわざくることもねえ。条件にのまれないほうが身のためだぞ！？」

ベグオンが必死に危険性を訴えている。だが答えは変わらなかった。

「私は山賊にはなりたくありません。それに、グレイルを倒すためなら、協力を惜しみません！」

「俺は母さんの敵討ちのためならなんでもやるぜ。危険だろーがなんだろーが、おもしろそうじゃねーか！！」

2人の言葉に、力んでいたベグオンの顔が緩んだ。一気に力が抜けた。

そしてふっと溜息をつく。

「そうか……。じゃあわかった！　俺も賛成する！」

その一言でシンもグルイドも喜び飛び跳ねた。飛び跳ねたのはシンだけだが。

グルイドもそれを見ながら笑っている。

そのはしゃぐ男2人を横目に、レイスも笑ってベグオンに言った。

「いいじゃないか。あの2人はきつと戦力になるし、なによりおもしろそうだぞ」

ベグオンは「ふっ」と言う。溜息だかなんだかはよくわからない。シンとグルイドは聞いていない。

「レイスよ……。でもあいつら、まだ覚悟が生半可なようだ」
「……覚悟なんていずれ決めるさ」

2人の短い会話は終え、はしゃぐシンたちを止めた。そこで丁度、兵から報告がはいった。

「失礼します！ レイス様！ ただいま、傭兵団の皆様がご帰還なされました！！」

気合の入った兵の声も、大きな広間では独り言にしか聞こえない。だが4人は、それをキツチリ聞き取った。

「お！ 帰ってきたか」

「帰ってきたな……」

レイスとベグオンは歩き出す。残りの2人もついて歩く。そして少し歩くと、入り口が見えてきた。

「君達がこれから付き合っていく仲間。仲良くしてやってくれ。あれが……」

その数7人。それとベグオン。思ったより穏やかな空気で、夜明けの光で、妙に輝いて見えた。

「ライル傭兵団！ 全員帰還しました！」

第六章：思いつき城主（後書き）

感想や評価をお待ちしております。

第七章：シンの初出撃（前書き）

かなり時間が空いてしまつてスイマセン^^；
これからがんばるのでよろしくお願いします。

第七章：シンの初出撃

後ろ光がさして眩しいなか、ライル傭兵団計7人が帰還した。そのなかで真つ先に元氣そうに声をあげたのは、小さな弓を持つ少年だ。歳は15ぐらいだろう。

朝日が差し込み、城中が一気に明るくなった気がした。

すぐに全員が城の中に入り、レイスとベグオンの前に集まる。

「レイス！ 腐竜は片付けたぞ！」

「うむ」

これは今帰還したジエイクの声だ。

「レイスさん！ もう休憩していいですかね？」

「ああ、いいよいいよ」

これは、ハロンの声。

レイスの休憩の声が入った途端、7人は急にバラバラになり、城の各部屋に散っていった。

そこにレイスが一声。

「やっぱダメだ！」

ええ！？ とはならず、まるでいつものことのように7人はまたレイスとベグオンの前に並んだ。

「なんですか？」

メンバーの1人が言う。もちろん台詞は決まっていた。

「今日からお前らライル傭兵団に入隊することになったシンとグルイドだ！ 仲良くしろ！ 以上！」

「押忍！」

あれ？ なんか簡単すぎる説明だな……、と思ったシンたちだったが、口には出さない。

なんかライル傭兵団メンバーたちも今ので納得したようだ。するか？ 普通。

そして7人が立ち去ろうとしたときだった。

「ちよつと待て！」

レイスが呼び止める。7人は止まる。そしてレイスが、シンたちに一方的に団員の紹介をさせた。

まず一番右の、今は馬から降りている騎士・ハロンを差しした。

「こいつがハロン。傭兵団では一番の新米……だった。仲良くしたつてくれ」

なぜか「してやってくれ」が「したつてくれ」にちよつと省略されたのはほつとく。

次にハロンの台詞を待たず、レイスは大斧を持った筋肉質な男を差しす。

「こいつがバリスだ。見た目はいかついが、気のいい奴だぞ」

その男はにつこり笑い、「はじめ……」と言いかけて言えず、レイスに遮られた。

「そんでこいつが……、あ、そうだ。サイだ。仲良くな」

「よろしくお願いします！……未熟者ですが、どうぞ、名前を覚えてください！……」

今度はレイスに負けない大声で、サイという少年は挨拶した。さつき真っ先に声をあげた

元気な少年だ。背中に弓を背負っている。小さいものだが。

「っ……、で、こっちの渋い髭がケイト。あんま喋らないけど、いい奴だから……」

今度は声を出そうともしない。そしてついに、「仲良く」は完全に省略した。

背中には、大きな体に負けない程の大剣を背負っている。

「え——……と、これ、誰だっけ？」

レイスとはぼけて、もうひとり、大きな弓を背負った小柄な娘を差した。

「ええ！？ それはないんじゃないですか！？」

「冗談、冗談。こいつがえーと、確かフィンだ。女だてらに大弓使う豪腕だ」

レイスは笑う。フィンは、レイスの挑発を無視して真面目そうに自己紹介を軽く。

「あ、私はフ……」

「で、残りの3人はわかるよな。ジェイクにサナに、団長のベグオ

ン」

「またも遮られたと、フィンは「くっ……」と言いながら下がる。どこか恋人のような雰囲気を

かもし出している。いや、恋人というよりは、さりげに両思いな学生さんみたいな、そんな感じだ。まあこれは、両方にその気がないのが残念な話だが。

「まあ、団員はこんなところだ」

勝手に紹介を始め勝手に紹介を終えたレイスは、さっさとその場を立ち去った。

団員は見送ることもなく、怒り気味にレイスを目で追う。そのあとすぐに、ベグオンがリーダーらしくシンたちに話しかけた。

「まあ、あんな奴だが民には結構人望あるし、頭も腕もいいから、つまり悪い奴じゃない。

……とにかく、今後ともよろしくな」

ベグオンにそう言われると、シンは「おう！」と。グルイドは「はあ……こちらこそ」と言い返した。

皆自分の部屋に帰って行ったあと、入り口付近から大広間に移ったシンとグルイドは、自分のことや、これからのことや、雑談で盛り上がって、陽が暮れるまで話していた。

おらあ！ 起きろ野朗共！

その怒声でライル城の中に住むほとんどの人が起きただろう。きつと。

シンたちが入団してから3日。何故かグレール王国は沈黙。怪しいのでこちらから攻めることもなし。

特にやることもなしに、ただ親睦を深めていたライル傭兵団だった。しかし、ついにしびれを切らし、レイスはグレールに攻め込む決意をする。

そのために10人は朝早くに起こされ、すぐに準備をさせられた。今日から本格的な「戦」になるかもしれない。よくわからない期待が、シンの中にはあった。

そういうわけで、レイスの案で一行はグレールの端・バーデンに攻めることになる。

と言っても、レイスも戦知らずなわけではない。少人数で正面から突っ込むようなことはしない。兵はライル城にいる半分。約200の精兵を連れ、バーデンに向かう。

大国グレールと言っても、その領土の30ぶんの1程度の領地。しかもそこを治める領主はマーゼレン並の暴君で、兵には結束がなく、約210人の兵たちでも十分だと考えたのだ。それに、城の守りも必要。

だから城には、ケイトをひとり残し、策を練って進撃を開始した。

「いいか！ 今からグレールの領地・バーデンに攻め込む！ お前たちは正面から突っ込め！

傭兵団員たちが背後からいろいろやるから、お前らは気にせず攻めろ！」

200の精兵たちに、レイスが言う。声は大きい、声は普段と変わらない。普通なら気にして戦いに集中

できないような説明のしかただったが、これも慣れているのだろう。大きな声で返事をし、平然と進む。

よく教育された兵だな……。と、思うグルイド。

今ので納得したのか……。？ と、疑問に思うシン。

今はバーテンに行く道中で、列になって馬に乗り、ゆっくり進んでいる。一番前に重い鎧を着込んだ巨大な重騎士たちがズラリ。その後ろに長槍を持つ兵たちが多数。重騎士に比べると少なめだ。

そしてその後ろに、ライル傭兵団。前の兵たちに隠れるようにしている。

標的はバーデン城。入り口の狭い通路から重騎士が突入。その後ろから長槍で突く。相手が面喰らっている間に、傭兵団は城の裏口にまわる。おそらく将は入り口に来て応戦。城主は玉座で待つだろう。傭兵団の奴らなら、将のいない烏合の衆を殲滅するのに時間はかからない。混乱に乗じて入り口からもどんどん攻め、挟み撃ちにして制圧という策戦である。簡単な策戦だ。

「お前らは今回が初仕事だな。大丈夫か？」

ジェイクが軽く話しかけてきた。シンは自信満々に言う。

「おう！ 負ける気はしねーぜ！」

「そうか」

ジェイクはふつと微笑み、また前を向いた。

「……実はな、あのレイスの弟……、レイトっていうんだが、グレイルの奴に殺されたんだ」

「！」

シンはハッとしたように顔を上げる。

「そいつは俺の父だ。つまりレイスは俺の叔父に当たるのさ」
「……へえ」

ちよつとびっくりしたのか、シンもグルイドもあまり声が出ない。

「んで、俺の父を殺したのが……グレール王ロウレング！ 王様が直々にやりやがったさ！」

「はあ……王が直々に……」

グルイドはとりあえず言う。他に言うことも見つからない。

「ま、あいつもあいつでグレールにや恨みがあるってわけだ！ だからやる気なさそうに見えるけど、実は結構あるんだよな。やる気！」

ジェイクは言い終えると、さつさと前の方に行ってしまった。といっても、列は乱してないが。

それだけの用件でわざわざ話しかけてきたりは、普段はしない奴だった。きっと和ませようとしてくれたんだろうと、グルイドはふつと笑う。

だがその横で、物思いにふけるシン。

この戦争で、家族を殺された奴は自分だけじゃない。今、そのことを考えさせられた。

グレールへの復讐と怒りの念は、膨らんでゆくばかりだった。

第八章：無力の二人

朝に出発し、もうすでに5時間は経過している。今もうす昼というところだろう。

レイス率いるライル正規兵・傭兵構成員は、遂にバーデンの町にたどりついた。

町は随分さびれており、にぎやかなのは遠目に見えるバーデン城だけだった。どうやら、このバーデンの領主の悪評は本当らしい。

町の人間は、商売人が所々座り、客をただずと待っている。他に人は殆どおらず、

客も来ず商人たちは痩せている。

敵の領地とはいえ、シンはだんだん腹が立ってきた。この領主に呆れた。

一行はバーデン城のお偉いさんになりすまし、門をくぐるとバーデンに簡単に侵入できた。

それから少し馬で歩く。……バーデン城は、目の前にそびえたっている。

そこからレイスは声を荒らげた。

「突撃イイイイイイ！！！」

その掛け声にし少し遅れ、兵たちも関の声をあげ、破城ついで城門を突く。突く。

すぐに城門は壊れ、兵士たちは城内に突入した。

バーデン兵とその領主は、毎日城で酒を飲み豪遊している。当然ビツクリして、酔っ払って、

戦えない状態だ。だが、さすがに将までそうであるとも思えない。

だからきつと、慌てた城主はまず真つ先に将を正門へ向けるはずだ。今のうちに、

傭兵団は裏口にまわっている。

レイスの予想通りだった。

「な、なんだ！？ て、敵襲！ マグラガン！ さつさと正門に行かんか！」

ありえない慌てぶりで、名前不明の城主はその城で最も強い将・マグラガンを正門へ向けようとした。だが、将は城主とは違い、至つて冷静だ。

「まあ落ち着きなさい、主よ。いくら弱小国家の一隊とはいえ、そんな正面から突っ込むことはありませんまい。私は裏門を見てきましよう。他の将兵を正門に向かわせるのです」

貴族のような喋り方のそのゴツい将は、そのあと慌てる城主を横目にさつさと裏門へ向かった。

その頃シンとグルイドを含む傭兵団員たちは、数多の敵を蹴散らし、裏門まで到着していた。

あと少し。あと少しの兵を打ち倒せば、城内に入ることができる。入れば勝てる。そんなときだった。

「困りますなあ。人の城でこんな挟み撃ちなど……」

シンの真後ろから声がした。怪しい声。シンはすぐにそれが敵であることを確信した。

「！ 誰だ！？」

シンは振り向き、そのまま後ろに飛ぶ。幸い、一緒に戦っていたグルイドが、その敵は全滅させていた。さすがである。

「誰だとは……、客の癖に生意気な。まあ、貴方には関係ありません。ここで死ぬのですから！」

急に怪しいオーラが殺気にかわり、シンはビククリしてまた後ずさり。そしてグルイドの肩の鎧にコンと当たり、グルイドも振り向く。

「どうした？ シン……」

「危ねえ！！」

振り向いたグルイドのすぐ目の前に鋼の槍が突き立てられ、今突かれるというそのとき、

シンがとつさに飛び込み助ける。マグラガンはシンではなく、その後ろのグルイドを背後から狙おうとしていたのだ。しかし、シンの助けで鋼の槍は空気を貫くことになる。シンの頬にかすり、血が出る。

「くそっ……」

シンはピツと頬を親指でこすり、血をなめる。傷口がビリビリする。なんとなく腹の立つ野朗だ。そう思ったシン。怒りに任せて己の槍をマグラガンに向かって放つが、軽々と避けられた。

「なんと面白みのない突き方……」

マグラガンは見下したような目でシンを見ると、大きな槍を一振り。シンは避けるが、後ろに倒れ、しりもちをつく。その後ろから、またグルイドが掛け声をあげて剣を振り回す。

だが、マグラガンは華麗にかわし、受け続け、連撃を完全に受けきった。

「やはり……。貴様らの戦いには美学がない」
「ぐっ……」

そるとグルイドは後ろに退き、シンと2人で構える。

「さあ！ 弱者よ！ 死ぬがいい！！」

なんの説明もないまま、マグラガンは2人に襲い掛かろうとした。だが、そこであることに気がついた。

——味方兵が……。全滅している！？

そう、シンとグルイドがまるで最初から戦力外だったかのように、残りの団員だけですでに裏門周辺の敵を全滅させていたのだ。辺り一面、死体だらけ。生きて立っているのは、ライル傭兵団一行と、マグラガンだけだった。

「しまった！」

マグラガンはベタな叫び声をあげ、すぐさま逃げ出そうとする。だが、もう囲まれている。

やっと気づいたようだ。マグラガンは、自分の力を過信していたことに。裏門に、自分独りで行っても意味などなかった。

「で、どうする気？」

「こんな奴に時間かけんなよな」

ベグオンのマグラガンへの問いかけと、ジェイクのジョークが少し時間差で放たれた。

マグラガンは高く飛び上がり、城門の上の屋根に飛び乗り、走っていった。一時撤退というやつだ。

「さ、行こうぜ！」

ベグオンが一言言うと、団員たちは「おー！」と声をあげ、城内になだれ込んだ。

シンたちは団員たちの強さに唖然としていたが、すぐに「お、おー！」と掛け声をあげ、一緒に城内に進入した。

シンたちが裏門から城に入った頃には、敵兵たちは慌てふためいて降伏。城内はもう制圧したと言っていいほど静かになっていた。ライル騎士団の看板に、偽りなしである。

「は、はえー」

「想像以上だな、シン……」

2人は呟く。だが、まだ戦いは終わってないことを傭兵団員たちは知っていた。

そうだ。マグラガンだ。あいつはまだ降伏なんかしない。それは誰もがわかった。

そのとき、城の天井が急に大きな音をたて、崩れた。綺麗に加工された石の天井の破片が、

ガラガラと降ってきて、上にポツカリと大きな穴が開いた。

「な、なんだ!？」

「あれを見る!」

兵たちのそんな声が飛び交う中、シンは顔を上げ、空を見た。

そのとき、聞き覚えのある貴族っぽい声が空から降ってくるように聞こえた。

「ははははは!! 調子ずきおつて、ライルの小僧どもめ!」

やはりだ。マグラガンは諦めちゃいなかった。

しかも、小型の竜のような生物にまたがり、上空を飛び回っている。

「な、なんだ!？ ありやあ!!」

シンが疑問を大声で叫んだ。それにレイスが答える。

「あれは『上竜』……。ただ人間が空を飛ぶのが目的で、特殊な薬を服用した竜だ。厄介だな」

偉く詳しいようだ。まあ、それについてはいろいろ調べていたのだろつ。

「竜に薬使って改造か……。気にくわねえぜ! 降りて来い!」

「くかーっかっか! 馬鹿め! 降りて来いと言われて降り

てくる馬鹿がどこにいる!？」

まさにそのとおりだ。降りてくるわけがない。

マグラガンは、大きく冷静な声で言った。

「おい、その小僧ともう1人のお守り野朗! どっちか来い!」

『お守り野朗』というのは腹の立つ挑発だ。グルイドが「なにおう!」と言いかけたときだった。

「なめやがって!」

シンが、普通じゃないようなとんでもない跳躍力で天井の穴を飛び越え、その上に着地した。

周りのライル兵たちも、思わず「おお」と声をもらす。

「くく……まずはお前か……」

マグラガンの挑発は尚も続く。シンは舌打ちして、槍を向ける。

「行くぞ!」

そう言った瞬間、シンは上空のマグラガン目掛けて走り出した。マグラガンの斜め下で飛び上がり、遥か上空のマグラガンの上竜の羽を斬ろうとするが、避けられる。

「ほう、まず竜を狙うか」

マグラガンは関心したように言った。シンは気に食わない。

「この！」

「だがやはり単純だ」

シンがもう一度飛び上がると、それとすれ違いにマグラガンは急降下し、シンの槍は空ぶる。

「……は？」

「とつた！」

シンが呆気にとられている間に、マグラガンはなんと、天井より下、城内のグルイドを狙い突進していた。

「しまっ……」

気づいたときには遅かった。ベグオンとレイスの、「危ない！」という声も虚しく消え、

グルイドは体を反らしたが、わき腹に槍が刺さってしまった。

「がっ……」

グルイドは声も出ないような状況になり、槍に貫かれてその場にドサツと倒れこんだ。

「グルイド……！！！」

第九章：横入りの矢の勝利

「グルイド！ 大丈夫か！？」

「こっちは大丈夫だ、任せろ！ お前はそいつとの戦いに集中しろ！」

ベグオンが叫ぶ。シンも任せることにした。

「てめえ……、卑怯だぞ！」

シンが怒る。だがマグラガンはそれを見て、更に嘲笑う。

「くくく……。戦にルールなし。ならば卑怯も、面白みと言えよう」「ぶっ殺す！」

シンがまた懲りずに飛び上がる。マグラガンは避ける。その繰り返しだ。

グルイドのことも気にかけてながら、慎重に戦わなければならない。飛びすぎてもだめ。不意を突かれる。

しかし、飛ばなければ届かず、隙ができて、シンがやられる。調節が難しかった。

「実におもしろくない！」

シンが飛び、しかし届かなかった。そのとき、その一瞬を突かれた。だが見事な反射神経で、体を反らして腹にかすった低度ですんだ。痛かったが、グルイドの怪我に比べればと堪える。そういえば、グルイドはどうしたのだろう。

屋根の上に落下後、シンはチラッと下を見た。そのとき。

「よそ見かね？」

小さな声が聞こえた。上空から、物凄い速さで近づいてくる。やられた……。シンが諦めかけたその時だった。

「お前こそ！」

また声が聞こえた。先ほどのものとは違い、大きく、鈍い声。それと同時に、剣が空を舞った。

マグラガン目掛けて投げられた、グルイドの剣だ。しかし、手負いのグルイドにできるはずなど……。ない。

だが、グルイドはもう手負いではなかった。

「降りて来い！ 將軍！」

叫んだのはグルイドだった。脇腹の傷は塞がり、あとには服に、血が染みるだけ。

シンも思わずグルイドの名を叫ぶ。だがどうして？ 何故傷は塞がっている？ 不思議である。

「ちっ……」

おもしろくないのはマグラガンだ。折角当てたのに、回復。おそらくグルイドを囲む円の

中の端にいる少女がやったものと、マグラガンは確信した。

そこで笑っている少女をギロツと睨むマグラガン。その少女は、サナだ。

前に説明された中に、『回復魔法』という物があった。グルイドはつまり、回復させられた。それだけ。

（まずあの小娘をやるか……）

イラッときたマグラガンは、槍を下に向けた。焦りで判断力が鈍ったのだろう。

掛け声をあげ、目立つサナを槍で刺しにかかった。その時。

「お前、馬鹿だろ？」

当然のごとく、シンの槍が突き刺さった。真っ赤な血が勢いよく飛び出し、ギャアアと悲鳴をあげる。

だが醜い声だ。さっきまでの貴族声とは正反対。

マグラガンはそのまま墜落した。だが無傷だ。そう、刺されたのは竜の方だったのだ。

無様なものである。どんなに優れた将でも、一瞬の油断と過信。そう、マグラガンは、

あの目立つ位置に立つ小娘をひとり、殺すのに技などいらないと思っただろう。それがベグオンの

策戦だったのには、焦りで気づかなかったようだ。

「ぐっ……、くそ」

マグラガンはなんとか起き上がった。隣に上竜が死んでいるのを見て、すぐに悟った。

敗北。

なんともおもしろくない勝負だったというマグラガンに対し、これじゃ満足できないというシン。

2人は敵同士だが、意見は一致した。

「決着つけるか」

大きな鈍い音が城内に響き渡り、2人の男は一旦間合いをとった。ただいま、決闘中。

レイスは、「やれやれー」と冷やかに、ベグオンは「はぁ」と溜息をついている。さっさと終わらせたいのだろう。

「ふん！」

途端にマグラガンが声をあげ、槍を大きく振りかぶる。そして、振り降ろす。

シンはかわし、突く。それをマグラガンはかわす。そして突く。避ける。斬る。

そんなものの繰り返しだ。グルイドだけは真剣に見ていたが、他の者達はかなり冷めている。

なにをこんな弱いのと決闘など……。そう思っているのはきつと、ベグオンだけではないだろう。

実際普段のシンならもうこいつを切り殺しているのは間違いない。だが、

今はシンの精神状態が雑すぎる。怒りに、復讐の念。勝てない焦りと、周りからのプレッシャー。

明らかにやけになっている。弱すぎる。

もうそれに呆れたのか、どこから声が、静かに飛んだ。

「終われ」

声とともに飛んできた矢が、戦闘中のマグラガンの喉に突き刺さっ

た。マグラガンはぶつと血を吐き、最後の力を振り絞り振り返った。自分を殺した、矢を放った者の顔を見るために。

自分の背後で矢を持っているのはひとりだけだった。そいつは、冷たい目線でシンと、自分のことを

見ていた。矢を持つ手を下ろした男。傭兵団長・ベグオンであった。

その姿を見た後すぐに、マグラガンの口からは更に血が溢れ出て、目を大きく見開いたままうつぶせになって倒れた。最後までベグオンは、冷たい目線でその姿を見ていた。

シンも驚いて、開いた口が塞がらない様子。自分が今決闘中で、もうすぐ憎いマグラガンを殺せた。

それを簡単に弓で射殺したベグオン。なぜ邪魔をした。手柄でも持つていくつもりだったのか。

そんな感情に刈られ、怒りの対象はベグオンに代わった。

「なんでだ!!」

シンは思い切りベグオンの胸倉を掴み、怒鳴る。自分より背の高いベグオン相手に、見上げている形に

なったが、剣幕はすごい。だがベグオンは全く動じず、相変わらず冷たい目でシンの目を真っ直ぐに。

ずっと見ていた。

でもシンはおさまらない。

「なんで殺ったんだよ! もうすぐ俺が殺してたじゃねえか!」
「黙れ!」

シンの第二声が入った瞬間、珍しくベグオンが怒鳴った。そして、拳がとんだ。

シンの顔に、クリーンヒットした。

「お前の私的な戦いに付き合ってる暇はねえ！ あれを見ろよ！！」

そう怒鳴ってベグオンは、丁度大きな窓から外の、さっき通ってきた丘を指差した。

その丘には砂煙が立ちこめ、沢山の騎兵が見えた。今きつと、走ってこっちまで来ている。

それはシンにでもわかった。

「わかるだろ……？ このクソ城主が援軍を呼んだんだ。あの数じゃあこっちのが不利。」

もう城主を殺してる時間もねえ。さっさと帰るぞ」

ベグオンはレイスになにか言って、レイスはそれを聞きいれて全軍に合図を送った。

「おめーら！ 退くぞ！ さっさと外に出て、遠回りでも退却だ！」

その合図に従い、兵たちは「押忍！」と声をあげすぐに城外に走って行った。

シンの周りを、兵は極力避けていた。

第十章：迫り来る敵 立たない男（前書き）

ちよつとかけなくてすいませんでした。

忘れないでチェックしてくれている方々、今日から再開します。ちよつと事情で、今まで書けませんでした。これから休まず頑張りたいと思います！

第十章：迫り来る敵 立たない男

沢山の兵たちがバーデンの町に猛スピードで迫っていたにもかかわらず、

ライル騎士・傭兵団混合部隊は捕まることはなかった。

迅速にライルへ戻り、城に帰還した。ベグオンの素早い判断のお陰で、皆は死なずに済んだ。

恐らく先ほどの敵援軍はグレールの本体の一部だったかもしれないと、後にレイスが発表した。

皆、早く帰ってきてよかったーと、溜息をついていた。

一部でもあの数。しかも、この兵たちがこうまで言うとは……と、グルイドの額からも冷汗が出た。

シンは未だ部屋で項垂れていた。いったい自分のどこが悪かったのかと、若者の感情だ。

でも、冷静になって考えてみると、自分が弱かったのがいけなかったのかと思ってくる。

そこに、ノックがコンコンと鳴る。シンは「誰」と一言言つと、ベッドから立ち上がった。

「俺だ。グルイド」

その声を聞き、シンは暗いまま出迎える。ドアノブを捻り、ガチャツと扉を押し開けた。

その腕に力が入っていなかった。

「シン……まだ……」

「いや……」

そんなこと言っているが、シンが気にしているのは確かだ。グルイドは相談に乗ることにする。

「俺あよう……なにがいけなかったんだ？」

シンが訊く。答えはない。そのまま深く溜息をついた。

しばらく沈黙のあと、グルイドは部屋を出て行った。帰り際に言った一言がこれだ。

「よく考えな」

グルイドはそれだけ言つと出て行った。シンはそれだけでも無性に腹が立った。

いつもなら、穏やかに、かつ元気に「おお」だ。だが今回はイライラと、憎たらしく「んだよ」だ。

何故か、無性にイライラする。その後、しばらくしてベグオンがやってきた。

「おい、俺だ。ベグオンだ」

扉越しにベグオンが話しかけてきた。シンはむすつとして答える。

「何」

その態度に逆にイラッときたのか、ベグオンも少し怖い声で言う。

「お前よ……、自分の>非<をわかってないだろ」

「俺のどこがいけなかったってんだ」

シンは怒りの捌け口を見つけたかのようにワガママを言い出した。

反抗期……とも少し違う。

「じゃあ一つだけ言っとくぞ」

ベグオンも一言言い残す気のようにだ。シンは扉の向こうでもたれかかっているベグオンの方に耳を少しだけ傾けた。

「考えるのは、己のことではなく、軍のこと。戦局を考え、兵法を学べ。」

敵を見て、己の弱さを知り、負けは認めて、軍が有利な方向に持っていく。

逃げるのもまた、ひとつの道。……俺の師が言っていた名言さ」

そう言うベグオンはどこかへ行ってしまった。少し考え、シンは我にかえた。

慌ててベグオンを探しに扉を開け、左右を見るが、もう誰一人いなかった。

シンは再び、なにがなんだかとベッドに倒れた。

「ベグオン！ 大変だ！」

「んん？ ああ、わかってるよ」

叫ぶのはあの、大斧を持つバリスだ。それに平然と答えるのはベグオン。

「おい、レイス！ やっぱり来たぞ！」

ベグオンが、上で立ってるレイスに一応報告。レイスは城の三階の大きな庭のようなところで立ち、前のめりになって遠い丘を眺めている。そして「わーってるよ」と言う。

こいつらはもう、最初からわかっていたようだ。バーデン城主をしとめなかったのが失敗。

すぐに駆けつけたグレール王宮騎士団の一部が、すぐにこっちに攻めてくるのを。

「いっぱいいるな」

レイスの眺める先、遙か遠い丘を走るは、ここから見るだけでおおよそ700。この城の兵は約400。

とても適いそうにない人数差だが、2人は至って冷静だ。

「で？ どうする団長。全員収集するかね？」

三回のレイスが、外に立つベグオンに問う。だがベグオンは首を横に振る。

「あの程度なら、俺ら傭兵団と、さっきと同じ200の兵で十分。さっきのとは違うもう半分の

200人。部屋のシンには、もう少し考える時間をやりな」

心の広く、強いベグオンはこう豪語する。レイスも微笑み「了解」と言う。

「さあお前ら！ シンに見せてやろう、俺たちの防衛戦を！」

「お——！！！！」

軍の士気は先程の攻めたときよりはるかに高かった。血の気の多い兵たちを、

たった8人で指揮するライル傭兵団で、その中で最も高い位置でおさめるベグオンは大きな存在だった。

「配置につけえー!!」

ベグオンは大声を張り上げ、全軍に命令。皆配置につき、傭兵団の皆はベグオンの周りに集まった。

「奴らが来次第、攻撃開始だ」

第十一章：戦を求め

すぐそこまで敵軍がやってきた。

騎馬兵がおよそ700。黒い鎧を着た兵士たちだ。

既に町には進入され、町の人たちは家のなかに隠れて、グレール兵たちが通り過ぎていくのを

ただ見ているしかなかった。

とうとう城の目の前までやってきた。傭兵団の皆は城の上。先程レイスが立っていたところに伏せて隠れている。下では交戦が始まった。

漆黒の鎧を深く着込んだ兵が、蒼い鎧で軽装の兵たちを襲う。

グレールの槍が腹に突き刺さり、血がどつと吹き出て倒れる。ライルは不利に見えた。

しかしだんだんおされてきたところで、ライルの反撃が始まった。

「今だ！ 放て！」

城の上に隠れていた傭兵団員の弓使いのサイとフィン。その2人を筆頭にして、

後ろの弓隊が一齐に射撃を開始した。

「大将を真つ先に討てと言われてます！！」

サイがフィンに、ベグオンから伝えられた目的を話す。

フィンはこくつと頷き、もう一度弓を引き、射る。背後からも沢山の矢が連続で飛んでくる。

「ええ、わかったわ。でも大将が誰だか……」

フィンが言いかけたとき、目端にひとりの男が映った。

豪華な黒馬にまたがり、淵が金色で、しかも大きく他のよりも硬そうな鎧を着ている。

しかも周りには馬車やら護衛やら。きっとその男が大将であると、フィンは確信する。

そのとき、大将と見える男がくるっとそっちを振り向き、自分も弓を取り出した。

血の舞う戦場で、優雅に弓を構えフィンを狙った。あっちもきつと、フィンが弓隊長であることに気づいたのだろう。

しまった！

フィンがそれに気づき、身を隠そうとしたとき。もう大将は弓を引こうとしていた。

しかしフィンは、いろんな武器が。矢の入った袋や、弓隊の足なんかが邪魔して、上手く伏せられない。

死ぬ！ そう思って背筋が凍りついたときだった。

「オラオラオラオラア！ なにやってんだよ大将さん！！」

ジェイクだ。短刀を2本持って戦場を駆け抜け、沢山のグレイル兵を蹴り、殴り、斬り、もう大将のもとまでたどり着いた。

「ちいっ！」

大将も弓を落とし、剣で応戦。しかしジェイクは、普段見せない気性の荒さで連撃をかける。

その素早く、力強い攻撃と、なにより気迫におされ、対象はあっという間に地にひれ伏した。

「ぐあっ！」

「おいおい、弱すぎねえか？」

よくやったと一息つくフィンのことは、多分気づいてないだろう。幸運だった。

だがジェイクがとどめを刺そうとしたとき、全部殺したと思っていた周りのグレイール兵が襲い掛かって

きた。ジェイクは瞬時にそれに気づき、全部に応戦。次々になぎ倒してゆく。

きつともう、ジェイクだけで50人は殺しているだろう。

そこで油断し、立ち上がってジェイクの背後を狙う大将をサイが狙った。

弓に射られ、大将はあっけなく愛馬の隣に倒れた。もう死んでいる。

「やった！ やりましたよフィンさん！！」

「はいはい、わかったから……」

大将を倒したと思ってハリキルサイを、フィンは軽くあしらい攻撃を続ける。

だが奴は、700の兵のうち300人で構成された一部隊の隊長であっただけで、全軍の指揮官ではなかった。

その部隊の指揮は消え、乱れたが、あとの部隊はむしろ士気が上がってきている。そんな矢先だ。

「はっ！」

ハロンだ。一騎で敵陣に突っ込み、自慢の薙刀で沢山の敵を斬り、

駆ける。

ジェイクのいた方とは間逆の方向で、どんどん拠点のライル城から離れていく。

「ハロン！ 出すぎだ、退け！」

遙か遠くから、ケイトが声をかける。血だけではなく、兵の気合、悲鳴、斬られた音。

それらの騒音が飛び交う戦場で、そんな声聞こえないはずだ。だが、なぜかハロンには聞こえた。

「あ、わかった！」

ハロンは素直にケイトのもとへ戻る。その道中も、薙刀で周りの敵兵を蹴散らしながらだ。

この調子なら、そのままそこにいるのも大丈夫だったのではないかと思うほどの勇猛ぶりだ。

しかも長時間暴れているのに、息が切れてすらない。新米ではあるが、恐ろしい騎士だと、敵兵たちはゾッとする。

「行くぞ！」

ハロンが戻ってきたところで、ケイトは大剣の勢いを更に強める。

ハロンと2人で、互いに背中を任せている。だがしかし、互いに武器が当たってしまうことはない。

大きく武器を振り回し、摩擦で火でもおこりそうな勢い。風圧も凄く、とても近づけない。

それでも恐れを知らない兵たちは向かっていく。それらを全てなぎ倒し、ついにその周辺から敵は消えた。

2人は一瞬武器を止めるが、目端にその部隊の隊長らしき人物をとらえた。ひとり怯えて立ち、剣を構えて震えている。だが同情などしない。

「つああっ！」

2人が同時に斬りつけ、その部隊も壊滅。2人はとりあえず安心だが、どこから矢が飛んでくるかもわからない。すぐにハロンの馬に2人ともまたがり、鞭を入れて城の方へ引き返した。

そこならグレール兵も多く、容易に矢など射れまいと。そう思った。いつても、どちらかと言うとひとりでも多くの敵を倒すために向かったのだが。

今もう、ライルが圧倒的に有利になっていた。最初サイが隊長を射り、ジェイクで100人近く殺した

部隊にはあとからハロンとケイトが加勢。あっという間に全滅。その前にハロンとケイトで潰した部隊は人数100人の小部隊。これで合計すでに400以上の兵を殺して

いる。たった5人の傭兵と、わずかの弓兵だけでだ。それに比べ、ライルの勢いにおされてほとんど

反撃できないグレール。ライルの損害は少ない。

だが、敵にも策がないわけがなかった。

「あ！ 大変です、城が燃えています！！」

レイスが城の中で椅子に座りながら、勝利を確信して酒を口にしていたところだ。

城内見張りの兵が大声を出した。

「ああ、そう」

レイスは冷静に酒をまた口に含む。「ああ、そうって……」と兵は言いかけるが、レイスの口元が軽く笑っているのに気づく。なにかある。この人のことだ。そう思っ
て兵はおじぎをし、さがった。
レイスの人望はこんな風に培われていたりする。皆から尊敬されている。

見張り兵の言うとおり、城の裏口付近が燃えて、敵の兵が押し寄せ
ている。きっと、

グレールの一部隊が、700の軍隊の起こした騒ぎに乗じて兵のい
ない裏から火計を試みたのだろう。

だがこのライル城の者達の前には、そんな計略は無駄。

「サナ、どうぞ」

裏口側の城内から、ベグオンが大きな声でサナに合図した。城の上
で待機していたサナは、「了解」

と言って両手を空に掲げた。

するとどうだろう。もともと夜で、暗かった空に更に雨雲が現れ、
滝のように雨が降った。

すぐに火は消え、ビックリしているグレール兵たちが空を見ている
と、火の消えた裏口から沢山の
ライル兵が突進してきた。

「うわあっ！」

「なに……」

グレールの小部隊の声は虚しく消え、雨の中ライル騎士団に斬られていった。

実はレイス。あらかじめ相手の裏口の攻撃を読んで、ベグオン、サナ、バリス、グルイド、そして

騎士団本体は裏口に向かわせておいた。雨が降ったのは、サナの『特殊魔法』の仕業だ。

だが軍師のいないライルならまだしも、軍事国のグレールが何故こんな単純すぎる策を使ったのか。

それは、ライルには軍師がいて、日頃から思わせておいたのだ。とても頭のいい軍師が。

どうやって思い込ませていたかは秘密である。とにかく、レイスは事実上頭がいいので、敵国の心理を

上手く操って単純な策にするようにした。日頃の行いがものを言った。

「うおお！ 負けんぞお！」

グルイドは前より張り切っている。騎士団の先頭で、新調した剣を振り回し雨の中奮闘している。

お陰で騎士団たちも、どんどん士気が上昇して再び関の声をあげ、一気にグレール小部隊を半分まで減らした。以外な功績だった。

「グルイド、張り切ってんなあ」

ベグオンはそんなことを呟き、ニヤリと笑う。

「隊長の俺もやらねえとなっ！」

グルイドの覇気は騎士団だけでなく、ベグオンの士気まで上げた。だが、正面の軍よりも多くの増援が裏口に押し寄せてくる。ここまで裏口にはかり攻撃が集中するのは、レイスにとっても誤算だった。

まあ、それでもこっちが勝つことはわかっている。しかし、レイスはなぜか不服そうな顔をしていた。このまま終わってはいけない。そんな顔をしていた。

——いいなあ……

ベッドに座り、窓から裏口の方を高見の見物しているシンだ。自分は負けた。おまけにふてくされて、戦に出ようともしない。それに比べて同時期に入ったグルイドは、軍の勝敗に大きく貢献しようとしている。シンが深く溜息をついたときだった。

「おおー。新入団員のグルイド、すごいな」

扉の向こうから声が聞こえ、シンははっとしてそっちを見た。扉は開いていない。外で独り言でも言っているんだろう。もう少し近づいて盗み聞きに集中した。

「こっちのシンも、頑張れば強いんだろうなあー……」

それを聞いてシンはうつむき、また悩み続けた。

「あいつが戦に出てくれれば勝てるかもな……。でも出なきゃ……」

シンは顔を上げ、扉に耳をくっつけた。

「必要とされてるのになあ」

その一言を言い終えたとき、シンはもう扉を開けていた。

そこには、誰もいなかった。シーンとした廊下に、窓の外から戦の音だけが響く。

シンは辺りを見回し、最後に右を振り向きニヤリと笑った。

「へっ！ わかったよ！」

そうわざと大声で言っ、シンは体を返し、槍をとって走り出した。そして部屋から飛び出た。窓から大きく跳び、戦場に落ちた。

「行つてやるよ!!」

シンは完全に復活したように、敵陣の真ん中を独りで暴れまわった。自軍の場所とは、遠く離れた位置に着地したのだ。

シンの部屋の前の廊下。そこを右に真っ直ぐ、突き当たりをまた右に曲がったところに、酒の入ったグラスを持った一人の男が壁に寄りかかっていた。

「ようやく行つたかよ」

男はふっと笑みを浮かべ、その場を立ち去った。やる気がないようで、誰より強く計算高い。

そんな意味不明な男・レイスの仕業だった。

第十二章：戦は一瞬

「死ねやあ——！」

シンが敵陣の真ん中で独り、自慢の大槍を振り回し始めた。空から急に降ってきた男に、戸惑って武器がでないグレール兵。それをいいことに、シンは奮闘。沢山の兵を蹴散らしながら、ベグオンたちのいる裏門の方へ徐々に近寄って行った。

「む？ ……シン！」

大刀で暴れていたベグオンは、シンを目に捉えると喜んで手を振った。

その隙に攻撃を試みる敵の軍勢だが、ベグオンは左手で大刀をブン回し、的確に兵を斬っていった。

顔もシンの方しか見ていない。それにあの重そうな大刀を左片手であそこまで使うベグオンは凄いいものである。シンも「すげー」と思わず見入るが、すぐに戦闘に戻る。

その勇猛なシンの姿を、グルイドも見つけた。

「シ、シン！ 来てくれたのか——！」

「あたりめえよ！」

シンは豪快に笑ってみせた。さっきまでサボっていた分だと言わんばかりに、どんどん敵兵を切り刻んでいく。槍なのに、突くより、斬る。

「今行くぜっっ！」

そう一声あげるとシンは、驚くほど大きく飛び上がってグルイドの隣に着地した。

十メートルは飛んだ気がする。グルイドは驚愕して、思わずシンを見た。だが敵は攻撃してこない。

シンが一瞬でグルイドの周りに群がる敵を切り伏せ、その後も殺伐としたオーラで兵たちを怯ませて

いるからだ。シンがグルイドにやけに楽しそうに言う。

「行くぞ！」

「お、おう！」

グルイドもとつさに返事をし、再び腕を動かし始めた。

少し時間が経って調子付いた2人の息はピッタリだった。相性バツグンだ。

その暴れた猛獣とその子供のような姿を見ているうちに、他の傭兵団員と騎士たちも士気が湧いてくる。

そしてその分、グレールの士気は落ちる。

「おらあ！ 俺たちも負けるな！ 皆殺しだ！」

ベグオンもその影響を受け、調子に乗って皆殺し宣言だ。だがこのライル騎士団、

皆血の気の多い奴らだ。恐ろしく感じるどころか、さすがベグオンさんだぜ！ という感じで逆に

相手を恐れさせている。もうこれは、あまりにも凄すぎる。本当に人間だろうか。

「あ、あんな奴らと戦えるか！」

「話が違う！ 火計はどうしたんだよ！？」

グレイルの兵たちは、二人の姿を前にすると戦意喪失。現れた敵の半分は逃げ、もう半分は死んだ。

もうこの二人に敵はない。グレイル兵が、ただ周りを飛び回るだけのハエのようだ。

「ほう、ライルにはなかなか活きのいいのがいるようだな」

それを遠目に睨む男が一人。丘の上から、戦場を見物している如何にも強そうなグレイルの将だ。

「そうですね。傭兵団にまた新団員が加わったようで。もう弱小国ではありませんね」

その隣で馬にまたがるは、軽装の真面目そうな青年だ。馬は毛並みが綺麗に整えられている白馬。

その青年自身、身だしなみを整えている。

「ローレン。わしもあんな強者と一戦交えたくなったぞ」

「駄目ですよ、ジェンク様。あなたはあくまで、グレイル最高將軍なんですから。」

こんなところであなたのお手を煩わせたら、僕が罰を受けてしまいますよ」

青年ローレンは言う。グレイル最高將軍とは、グレイル王国で最も強いとされる将のことだ。

そんな男でも、グレールの王を慕う。その王の人望も、相当なものなだろう。

ローレンの小言を聞いて、ジェンクはむっとする。

「ふん。わしを戦に出さないつもりか。そんなでは、私の槍の腕は衰えるばかりではないか」

ジェイクはふつと手に持つ大きな槍を見る。綺麗に光る刃が、天を向いて立っている。
新調したばかりだ。

「とりあえず今は、見るだけで我慢してください」

ローレンも呆れたように言つと、背後に控える将の方を向き、清純な声で言つた。

「シャクロン。一応こつちも負けるわけにはいかない。と言っても勝てそうにない。

兵をあと200引き連れて、お前も裏門に加勢しろ」
「はっ」

返事をするシャクロンは、自分の部隊150と追加の50の兵を連れて丘を駆け下りて行つた。

「げっ！ まだ増援が来るぞ！」

シンがそれを見て驚愕。ピタリとやんで、もう来ないだろうと思つていたグレールの増援がまた来た。

さすがに疲れる。ここまでやると、だんだん息が切れてくる。やばいと思ったその時だ。

「おーい！ 大丈夫かぁー！」

正門側から声が聞こえた。妙に高ぶった渋い声。ジェイクだ。それだけじゃない。その後ろからは正門で戦っていた騎士団員に、ハロンにケイトもいる。

城の上では、正門側から裏門側へと弓隊も移ってきた。

「加勢します、団長！ 一斉に放て！」

フィン的一声で、後ろの弓隊とサイの矢が一斉に斜め上空に放たれた。味方がいるのは手前だけ。

だから矢は、味方には当たらない。少し遅れてフィンも矢を射る。

「正門はもう終わったぜ！ ベグオン！ もっと進もうぜ！」

「ジェイク！」

ベグオンはジェイクに声をかけ、周りの敵を無数に蹴散らしながら駆け寄った。

ベグオン、ジェイク、ハロン、ケイト。この四人でかたまって、近寄る者全てを吹き飛ばしていった。

と、それを見ながら独りで戦う、よく言えば孤高、悪く言えば寂しい戦士がひとり。

「皆……俺は？」

小言を呟くのはバリスだ。すっかり忘れられているが、ずっと斧を振り回して戦い続けている。

「……まあ、いいか」

バリスは簡単に割り切り、勇猛果敢にもっと進んで城から離れていった。

それにすぐさまフィンが気づき、射撃を停止するよう弓隊に合図を送った。

「僕らの出番はここまでのようですね」

「そうね。この戦は、もう彼らに任せましょう」

会話しながら、弓隊を引き連れて城内に戻る、これも二人の戦士だった。

そいつらと同じ位置から攻撃しながら、まだ停止しない娘がひとり。

「燃えろ！ フラッシュ！」

たった独りで戦うのは、バリスだけじゃないようだ。上空から魔法をかまし、大地を焼き尽くすサナ。

寂しかったバリスも、その姿を見て思わず笑みをこぼす。

「よし！ 俺ももつとやるか！」

バリスも、サナのお陰でもっと頑張れたようだ。この二人も、実は結構仲がいい。

「さあ、ライルの小僧ども！ 快進撃はもう終わりだ！」

そこに突っ込んできたのが、グレールの将シャクロンであった。

「逝けい！」

シャクロンが馬にまたがり、シンに向かって一直線に突っ込んだ。

頭上で槍を振り回し、シンの目前で構えた。そのまま止まらず、助走をつけて突く。

しかしその一瞬。シャクロンの一撃はことごとく受け流され、シンの槍がシャクロンの背中を狙った。

「ぐあっ！」

ほんの一瞬だった。シャクロンは落馬しその場に倒れ、切り口が深く、出血も酷く即死した。

丘の上から眺める二人は戦場を偵察していた兵からその話を聞かされ唖然とした。呆気なすぎる。

「危ねえ」

シンはそう一息つくと、大声をあげた。

「こいつ武将だよなあ！？ 討ち取ったぜ！」

その一声で周りの戦はピタッとやんだ。そしたみな一斉にシンの方に振り向く。

本当だ。シャクロン様だ。そんなざわめきのあと、グレールの兵たちは怯えて退却、いや、敗走を開始した。

今回の戦のあと、シャクロンはレイスの気遣いで土に埋められ、木製の十字架を立てた墓が作られた。

十字架には、「グレールの誇り高き将・シャクロン」と書いてある。シャクロンは、武将であり、またグレールの小さな村を治めるいい領主でもあった。

その村の住民たちはシャクロンの死の報せを聞き、おおいに悲しんだそうだ。

こうしてこの戦は幕を閉じた。シンとグルイドの活躍は大きなもので、レイスからはなにをされたかというところ……。誉められただけだった。まあ、それが相応だろう。

戦の翌日、体を休めているライル城の人たちだが、突如城の前に大きな軍隊が現れたのに驚愕。

そんなこと、レイスもベグオンも言っていない。あの二人なら、敵が来る前に予測するだろうし、第一なんでもここまでに気づかなかったのかと。だが、その一軍は敵ではなかった。

「おおー。よく来たね」

レイスが喜んで正門に出迎えた。すると軍の皆は敬礼。そしたすぐきおつけ。

レイスが両手を前に出し「やあ」ともう一度。すると軍のひとりが大声で話し出した。

「ライル城・城主レイス様！ 我々は、約束通りライルに助力にきた、ジキル正規兵です！」

「ああ、わかつてる」

城内の窓の部屋から五、六人で集まって覗いている騎士団たちはまた驚いた。

ジキル正規兵といえば、このライルという『土地』ではなく、それ

以外にもライルを含め

ローラシア半域を治める国の名前である。ライルは、ジキルという『国』の中にある『領地』にすぎない。

だから、ジキルの方が兵の数は圧倒的に多く、その一部をお借りしたというのだ。

「でも、何故？」

そんな疑問が兵たちには浮かんだ。別に今まで通り、四百の兵に傭兵団があれば城を守るぐらいできる。

確かにだんだん戦いは激化してきているし、今まで通りにはいかにいかもしれない。だが、
そんないきなり何故？ と、そういう疑問だ。

そしてそれを、兵のひとりがレースに訊いてみた。しかし、誰がなにを言おうとレースと、
それに付き添うベグオンは、「まあ見とけ」としか言わない。だが、
これだけは誰にでもわかった。
これから、なにかが起こる。

「おーし！ よく聞けえ、血の気の多いライルの兵士たちよ！」

朝食の時間、食事を始める合図のあとレースが大声で全兵に言った。

「これから傭兵団は、兵を百人引き連れて城を離れることになった！
奴らがいない間、

お前達を支える勇気ある兵たちを、お国からお借りした！ 千人だ！
これから城を大きくする拡張工事が行われる！ 食事が終わったら全員城の前に集合！」

話の途中から、驚きの声があがっていた。そして話が終わった頃には、もう食事が唾だらけになる程皆が大騒ぎしていた。

「な、どういうことだ！？ レイス！」

とつさに、すぐ隣で食事をしていたシンが言った。慌てて立ったせいで、椅子はガタンと後ろに倒れた。

「どうもこうも言ったとおりだ。お前たち傭兵団員は、百人兵連れて明日には出発する」

レイスは不適な笑みを浮かべて答えた。シンは「ぐっ、だから……」
と言いかけてやめる。

これ以上は不毛だ。この男に、そんなこと何度言っても意味はない。今度はベグオンの隣で食事していたフィンが立つ。

「だ、団長！ 知ってたんですね！？ なんて教えてくれなかったんですか！」

「いや、レイスが言うなって……」

「レイスさん！ なんて言わせなかったんですか！」

フィンの攻撃の刃先がレイスに向けられたとき、レイスが放った言葉はこうだ。

「……………サプライズ」

「うわ——っ！ 腹立つっ！」

ふざけたレイスの態度に、目つきを豹変させたフィンは腰からナイフを抜いてレイスに襲い掛かる。

だが、それを隣にいたサイがおさえる。

「ははは。まあ、別に異論はないだろ？」

「そりゃあないですけど……知らせてくれてもいいんじゃないですか！？」

フィンが冷静になって席に座る。レイスが「ま、ドンマイ」なんて言うからムカツときたフィン。

しかし今度は普通におさえている。ちょっと眉間にしわを寄せている程度だ。

「で、でもレイス様、行くなってどこに……？」

その争いを横から見て、先程フィンを慣れた様子で止めたサイが訊いた。

するとレイス、迷わずこう答えた。

「内緒」

第十三章：村にして、国

翌朝、また朝早くに起こされた。

起こされてすぐにライル兵とジキル軍で拡張工事開始。その工事を傭兵団は手伝わず

さっさと行ってしまった。城に残る大將はレイス。そしてベグオン率いる傭兵団総勢百十人は、レイスの簡単な見送りを横目に城を後にした。

「さあて、行くか」

ベグオンは背伸びをし、手を後ろから引いた。兵もすぐについてきた。

行き場所も告げられぬまま、ただ黙々と馬に鞭を入れる。進む方角はグレールのある南ではなく、よりグレールより遠い北の方だった。

「なあ、どこに行くんだ？」

シンが小声ですぐ隣にいたサナに尋ねる。しかしサナは、「私も知らないわ」と答える。

しかしその後、「ジェイクなら知ってるかも」と付け足した。ジェイクはベグオンと一番仲がよく、なによりレイスの弟の息子という立場だ。目的地を知っている可能性が高い。

それを聞いたシンは、馬を少しずつ横にずらして前を歩くジェイクの隣にきた。この軍は少数だから、移動は容易かった。

「なあ、なあ、ジェイク」

「あ？　なんだ？」

シンが話しかけると、ジェイクがだるそうに返した。戦中は誰よりも興奮して凄いい気迫のジェイクだが、普段はかなりだるい。冷静で、おとなしい。そして、渋い。シンから見ると、「カッコイイ」なんて思えた。

「言つとくが、目的地は知らねーぞ」

ジェイクはシンがこれからなにを言おうとしたのか読んだかのように先に答えた。

シンは一瞬驚いたが、「そっか」と呟くように言つて普通に戻る。

「ベグオンの奴が、教えてくんねーんだ」

ジェイクが少しシンに首を傾けてささやく。シンは「ほー」とまた小声で呟き、もとの位置に戻った。

戻るとすぐに、サナがにこやかに話しかけてきた。

「どうだった？」

「いや、知らねーってさ」

「そっか。彼なら知つてると思つただけど……」

会話はすぐに終了。サナは口を閉じてそのまま馬を歩かせる。

誰にも目的地を告げずまま、ベグオンは無言で北に向けて馬を歩かせた。

「ついたぞ」

ベグオンが小声で全軍に到着を告げた。その声は小さくても、何故

か軍全体に広く深く響き渡った。辺りを見回してみると、シンの周りにあるのは山ばかり。

多少霧が出てたが、周りが見えないという程でもない。すぐそこには、広い、いや、村にしては広い村が広がっていた。

「ここあ、どこだ？」

シンがベグオンの隣に移動し、訊いた。

「ここはジキルより少し北の、辺りを山に囲まれた普通より少しだけ栄える村」

「チェイス……だな」

ベグオンの話の途中に、ジェイクが背後から近寄ってきて割り込んだ。

何故だろう。シンも気配すら感じなかった。

「そうだ」

ベグオンは真顔のまま言う。真っ直ぐ前だけを睨み、険しい表情をしている。

「ジェイク……。なんだ？ チェイスって」

「チェイス国。アイリスという女王が治める土地だ。ローラシアにある国は俺らのジキルと、

海が大半を占める最も北のバールカイン王国。その二つの大国に挟まれる形になっている小さな国だ」

「村なのに国？」

「ああ、そうだ」

ジエイクは自分から入ってきたくせに手短に済ませ、前に出た。

「なあベグオン、こんなところにきて何するつもりだ？」

「ふ……」

ベグオンはそれ以上何も言わず、後ろに馬をかえして大刀を振り上げた。

「これから俺と傭兵団はチェイス国の女王にお会いしてくる！ お前らはここで待機だ！」

その合図を最後に、ベグオンは馬をおりて村に入って行った。その後にくる形で、傭兵団の皆、シンを含めて皆が村へと入っていった……。

比較的小さめの城・チェイス城。その門前に、十人の戦士達が、いや、客人達が集まった。ライルの軍が城の前で集まっている……。その報告を見張りの兵から受け、玉座の間で独り座るチェイスの女王・アイリスが直々に門に向かった。

「お主らか？ ライルの軍とは。…… たった十人か。我が国もナめられたものじゃのう」

アイリス女王が門の奥からゆっくりと歩いて出てきた。護衛は誰もつけず、綺麗な水色のドレスを身にまといゆっくりと。髪が見たこともない程サラサラで綺麗で、一瞬皆見とれてしまった。

「お会いできて光栄です。アイリス女王」

それにベグオンは微笑んで応えた。そっちの方こそうちをナめんな
というツツコミは、
敢えてしない。

「まあよい。ここになにをしにきた？　まさか戦を仕掛けにきたわけではあるまい」

気を取り直してアイリスが門の方に振り向き、ベグオンたちに背を向けた。そして目で
合図をし、一行を招き入れる。

ベグオンが城の中に向かってアイリスの後を歩きながら言った。

「グレールからの侵略によって、チェイス国も多少の被害をこうむ
っていますね？」

「……ふむ」

「我が領地も……ライルも奴らに手間取っておりまして」

「前置きが長い。率直に申せ」

アイリスがせかす。だんだん、暗い廊下の向こうに出口が見えてきた。
た。

ベグオンはもはやこんなつまらない話術など不要と、率直に言った。

「あなたの城の兵を少しかしていただきたい。これから我々はグレ
ールに乗り込み、

奴らの侵略を食い止めます。そのために、あなた方のお力が必要
なのです」

「ほう……」

アイリスは無表情で顔を動かさず、目だけをベグオンに向けた。会話がそこまで進むと、もう大広間に出た。高い位置に窓。そこから光が差し込み明るい。

湖のように綺麗に光る床に、踏むのを戸惑ってそれ以上進まないベグオンたちをおいてアイリスが前へと、大広間の中心へと歩いて行った。

「主らがグレールと戦うに足る器か確かめたい」

アイリスが冗談半分で言ってみると、ベグオンは余裕で「どうぞ」と返す。

アイリスもまた「ほう」と呟くように言って、振り返って一行の方を向き、言った。

「まあ、一日でそんなに人がわかるものでもない。今日はとりあえず、この城に泊まるがいい。案内役をつけよう。この城は綺麗だぞ」

大人っぽい声で微笑むアイリスに何か裏のような、企みのようなものを感じ取ったベグオンだが、確かに今日だけでは話はずかないだろうと判断し、「恐縮です」とペコツと頭を下げた。

第十四章：女王、余裕の防衛線

その日の夜中だった。大きな角笛の音が村中に響き渡り、村人たちは一斉に起こされた。

「敵襲——！！ 敵襲！！！」

夜中の見回りをしていた兵が高台の上から角笛をならし、慌てた声で叫んだ。

村人たちは慌てふためき、全速力で城に向かった。敵の軍が攻めてきたら、とりあえず城に逃げろと言われている。そのために、大広間はライル城より広い。

村人全員が城へと逃げ込み、窓から空を見上げた時だ。

皆目を丸くして驚いた。山を越えて村へ、いや、国へと攻め入ってきた兵はみな、奇妙な生き物にまたがっていた。

「……上竜！？」

シンとグルイドはつきり、上竜も一応竜。だから上流階級の一部の奴にしか与えられないもののだと思っていた。実際、バーデンで上竜を使いこなしていたのはマグラガンひとり。

だがしかし、今回は雑兵が皆上竜を乗りこなし、細身の槍をしごいて突っ込んでくる。

「なに驚いてんだ？」

正門から外に飛び出し、邀撃の準備をしたジェイクが平然と言う。

「いや、だってあれは、いや、だからあれ……」

グルイドは完全にパニックっている。シンは、むしろニヤニヤと笑いながら空から迫り来る
竜と人の大群を待ち構えている。

「ああ、そうか。いや、上竜はもともとこの大陸に存在している天然の竜とは素が少し違う。

天然竜が五十存在するとすれば、この上竜の素になる竜は二百存在すると言われる。

比較的小さくて、攻撃力や耐久力の高い天然竜より弱弱い草食竜。ハッキリ言って、

一般人が簡単に手なずけられるぐらいの竜からつくられてんだ」
「なるほど……だからあんなに、て、わあっ！」

ジェイクの説明に聞き入っているうちに、グルイドの目前まで敵の兵が迫ってきていた。

しかし説明していたジェイク本人に守られ、転んだだけですんだ。

「大丈夫かよ？」

「あ、ああ。ありがとう……」

少し焦る様子でグルイドはジェイクの手をかり起き上がる。

「そんな慌ててたら勝てる戦も勝てないぞ。シンを覚えてみる」

ジェイクが指差した先で暴れていたのはシンだ。大声を張り上げながら、自慢の槍をブンブンと振り回して迎え撃っている。シンが何人か蹴散らし、周りに死体が目立つようになったころ、目の前から

直線に一際大きな上竜を扱う騎兵が突っ込んできた。だがシンは笑う。

「へっ！ 甘え！」

シンは槍をしごき、真っ向から突っ込んで自分の胸を狙ってきた騎兵の隙だらけのコメカミを

貫いた。一閃だ。その騎兵は前のめりにドシャツと倒れ、滑ってシンの後ろに倒れた。

頭からドロドロと血が流れ出て、あたり一面真っ赤だ。

シンは槍を突き出したままカッコつけている。

「凄い……、あいつ、こんなに強かったのか」

グルイドがあつと驚いているときだ。ジェイクが声をあげた。

「くるぞ！ 歩兵隊だ！」

いつの間にか二人の前に迫ってきたのは多数の歩兵隊だ。地上に舞い降りた上竜の尾から飛び降り、様々な武器を持って突っ込んでくる。上竜の背と尾とで二人乗りしてきているので、ひとり降りてももうひとりが上空から襲う。

グルイドも慌ててその兵たちを蹴散らしにかかる。隣のジェイクはいつも通り余裕の表情で

雑兵を切り刻んでいる。そのまた隣では、ベグオンやケイトなどの歩兵が戦闘中だ。珍しく、

かたまつて戦っている。

その時、城の上から声が鳴った。

「ライルの者たちよ！ もうよい！」

傭兵団員たちは一斉に振り返った。城の上で堂々と立っているのは、あろうことが

女王アイリスだ。城主があんなところに立っただけで、弓兵に格好の的だ。

丁度アイリスに向かって、一筋の光がヒュッと放たれる。

「危ない！」

ベグオンが叫んだが、もう遅かった。矢はカーンと音をたて、城外へと落ちた。

「……あれ？ 落ちた？」

さすがにベグオンもビックリしている。そして顔を上げてみると、アイリスは無傷。

その後、もう一本矢が飛んできた。今度はベグオンも目を離さず、また「危なっ……」と叫びかけた時だった。

一本の矢はアイリスの直前で綺麗な音をたてて弾き返され、地に落ちた。

アイリスはふんつと笑っている。

「あれは……」

「ここは私の城なり！ 主らの助けは必要ない！」

アイリスが強がっているが、まだまだ続いて無数の矢が閃光のよう

に飛んでくる。

だがそれらは全て、アイリスの直前で弾かれた。

「あの女王、まさか……」

ベグオンがハッと感づいたときだ。アイリスは両手を上空に掲げ、そこから眩しく光を放った。

「魔道士!？」

「我が魔法は、そのような脆い棒では貫けぬ!」

第十五章：メリット

「ジェネラルフラッシュ！」

アイリスが叫んだ途端、真上に掲げた両手先から目がくらむ程の光が発された。

ベグオンも思わず目をつむり腕で顔を覆い隠す。ジェイクは少し古いマントで、顔を覆い隠している。

「ジェネ……かなり高位の攻撃魔法か！」

ジェイクはかなり驚愕している。今アイリスが使ったのは、サナでも到底使えないような

かなり位の高い光攻撃魔法だ。彼らが目を開け、動けるようになったとき。

周りに敵は……もう、いなかった。

ジェイク・ベグオン・グルイドの周りに群がっていた歩兵隊は皆焼け焦げ、無残な死体に。

シンに襲い掛かってきていた上竜使いは、地に落ちバラバラだ。

「な、なんつー恐ろしい魔法使いやがる……」

ベグオンが口から恐怖を感じる言葉をこぼす。だが、全滅したわけではない。

アイリスから少し離れた位置にいた敵はまだ生きている。そして懲りずに襲ってくる。

「ちっ！俺たちの出番がねえぜ！」

皮肉をたらしめて、またもベグオンは暴れだした。先程より大きく大刀を振り、
大きな気合を発し、地を叩き砂煙を巻き上げた。時折血が混じっている。

シンは能天気な、燃えるぜ！　とでも言いたげに突いたり斬ったり。こちらの士気は上がる一方。

次々攻めてくる敵兵たちは、その様子を見て戦意喪失。
瞬く間に逃げ出した。敗走だ。

戦が終わりに、傭兵団もチエイス兵も皆無傷で城に戻ってきた。
城の前で敵を食い止めた傭兵団も大きな功績だが、なんと言ってもやはりアイリスの魔法が効いたようだ。

「ふん。主らが余計なことをせずともあんな奴ら、簡単に撃退できたわ」

殺気がすっかり消え、穏やかになったチエイスの城。その城門の前でひとり、決して穏やかではない女がいた。何をそんなに怒っているのだろうか。

「まあ、いいじゃないですか。邪魔したわけじゃないんだから……」
ベグオンがなんとなく呆れ気味に肩を落として言う。アイリスは体を勢いよく翻し、

城の中へドスドスと足音をたて入っていった。

「まあいいわい。中へ入れ」

「失礼します」

ベグオンが軽く頭を下げてからアイリスについて城へ入っていった。他の者達もバラバラに会釈をしながら歩き出す。

廊下を先程とは違う方向に真っ直ぐに歩く。だんだん薄暗くなってきた、壁に一定の間隔でローソクが並ぶ。ローの垂れるのが不気味だ。壁には不規則に、所々仮面が飾ってあったり置物が置いてあったりした。不気味だなあと真顔で思うシンはなんとなく壁を見上げ、飾りを見してみる。

「主らが強いことは知っておる。だが、経済力がない」

歩きながらアイリスは振り返りもせず言う。ベグオンは苦笑して「ええ」と素直に言って後頭部をかく。後ろの皆はただただ黙って歩き続けている。

「ハッキリ言って、主らに軍をかしてもなんのメリットもない」

アイリスの厳しい一言にもう一度笑顔をつくるベグオン。辛そうだが、凄く辛そうだ。

だがベグオンは未だに笑顔を絶やさない。なんとかして交渉を成功させなければという団長の意地だ。

そこまで言うと、目の前に大きな胸でできた扉が姿を現した。その前で、アイリスは立ち止まる。

「だが、さつきな。こつちにメリットをつくる方法を考えた」
「というと？」

ベグオンの表情が微妙に明るくなる。いや、もうさつきから明るかったが、なんとというか、表面的ではなく、心の底からの明るさというか、そんな感じだ。

「軍はかさん。だが、この扉の向こうにおるひとりの兵を主らに与えよう」

ベグオンはもう驚きもしない。びっくりし慣れた。もうこれぐらいで驚かない。

この世界ではもはや、今の常識など通用しない。一人ひとりが超人といえるのだ。まあそれも、一部の将のみだが。とにかくベグオンは驚きはしなかった。

「ニーシャ！ 開けるぞ！」

アイリスは今までより比較的大きな声を出して、ギイツ、と胸の扉を押し開いた。

部屋の中に広がっていたのは、やはり水色の世界だった。

石ではなく、綺麗な水が浅く広がり足がつかる。だがつかるのは靴だけなので誰も気にせず中へ入っていった。

奥に向かって祭壇に正座し、なにやら祈祷をしていたこれまた水色の綺麗な髪をした娘がこちらに振り向いた。アイリスより少し若いようだが、どこことなく雰囲気似ている。

「母上……」

「ニーシャ。もう祈りの時間は終わっただろう」

この娘はどうやらアイリスの娘らしい。かなり若いんだろう。サナと同じくらいに見える。

「祈りは長い方がいいと……、叔母様が……」

アイリスが小さな声で言うと、それをなんとか聞き取ったアイリスはゆつくりとニーシャに歩み寄ると、ニーシャの肩を両手でポンと叩き、立たせる。

「その分集中力が途絶えては意味がない。毎日少しずつ延ばせばいい」

立ってみると、ニーシャは以外に背が高く顔を見たときより年上に見えた。

母を見下ろし、ニーシャは一言「はい」と呟く。アイリスはちゃんと聞き取っているが、
ちよつと離れたベグオンたちにはよく聞こえない。

何を話しているのだろうと思ってちよつと背伸びをし、体をずらし
てニーシャの顔を遠くから覗き込んでみるが、声が聞こえるようになることはもちろんない。

その時、離れた位置から普通の声でアイリスが言った。

「主らの旅路、我が娘を連れて行け。傲慢の娘だ。きつと力になるだろう」

アイリスが言い終わると、ベグオンは「ん……」と喉から声を出し、ニーシャに視線を送った。

ニーシャも無言でただコクツと頷き、目で「よろしくお願いします」と言っているようだ。

「しかし、大事な娘さんを戦に出してよいのですか？ 危険な旅になることと思いますが？」

ニーシャの目はどこか自身があるようだったが、ベグオンは心配でたまらない。

しかしアイリスは静かに笑い、ニーシャの肩を叩いて真っ直ぐ視線をベグオンに向けた。

「我が娘をなめてもらっては困るのう。ニーシャは一人娘だが、戦に出たことも多数ある。

毎日修行もかかさないし、死んでも主らのせいにはしない。安心せい」

自分が死ぬとか死なないとかいう会話を聞きながらも、ただ喋っている方に目を向けるだけで動じないニーシャ。忙しく首を動かしているから、きつと首が疲れるだろうと心配してしまう。ベグオンは改めてニーシャの目を見た。ニーシャも真っ直ぐベグオンを見つめ、そして頷く。よほど自身があるのだろう。

その目を見てベグオンは確信する。この娘なら大丈夫だろうと。そして同時に、淡い期待と不安を浮かべた。

「わかりました。それでは、大事な娘さんをしばらくお預かりします。決して死なせないことを約束します」

「ははは。よいよい。最前線に出してやれ」

母が少し縁起の悪い冗談を言うが、ニーシャはチラツと母の方を見
てすぐに向きなおす。

よほど自身があるのか。それともただ無口なのか。

ニーシャの性格もよくわからないまま、その晩も城に泊めてもらっ
た。

そして、一行は出発の朝を迎える――。

「それでは、お心遣い感謝します。ニーシャ殿！ 準備はよろしい
か？」

「……はい。大丈夫……です」

途切れ途切れな口調はもう一晩で聞きなれた。ニーシャは白馬にま
たがり、荷物は小さな袋と
魔法に使用する用具のみだ。

「うむ。それでは、行け！ 健闘を祈る！」

アイリスが格好良くマントを翻し、昨日より鋭い眼差しをベグオン
に向けた。

「はっ！ 必ずやグレールを打ち倒し、大陸に平和を取り戻して見
せます！」

そう言うつとベグオンは、希望に満ち溢れた目を軍に向け、大刀を掲
げ「出発！」と叫ぶ。

軍はいつもの「押忍！」の掛け声。シンもノリノリだ。

こうして一行はチェイスの城を後にした。新たに戦力を加え、準備は整った。

これから向かうはゴンドワナ本域。危険な旅になることを覚悟して、アイリスに感謝しながら死地へと向かった――。

「彼らは、やれそう?」

城の奥からゆつくり出てきたのは、アイリスより少しだけ若々しい娘だ。熱く服を着こんで、動きものそのそとしている。

「さあな。あの者たちの器は、私には計り兼ねた」

アイリスは元気に声を発する。今周りには、無防備にも兵が一人もいない。

だから大声で話せる。アイリスは目の色をかせ、その娘の方を見た。

「お前は、計り兼ねぬか? 我が妹よ」

アイリスは、深く着込んだ服で顔がよく見えない妹の顔を覗き込んだ。

妹は動かず、素顔を見せぬまま言う。

「そうね……、私が思うに今のままじゃ、戦を止めるのは無理ね」

妹は少し間髪入れて、ベグオンたちの走り去った遠くを見つめた。

「団長の彼、立派だけど少し足りないのよ」
「私もそう思っていた」

アイリスの言葉が本当かどうかは不明である。

北の冷たい風が身に染みるなか、二人で遠くを見つめる姉妹。 会話はそこで終わり、二人は城内へと戻って行った。

第十六章：朝陽の微笑み

北のローシア域。その中でも最も北の地・チェイス。

そこで快く出迎えてくれたのは、ひとりの若女王だった。そしてその若女王は、今、ベグオン

たちに心強い娘をあたえてくれた。実力はまだわからない。だが、その娘はきつと

なにか強大な力を持った娘だということは誰もが気づいた。何か、大きな存在に催眠でもかけられたかのように。

その娘は異常な程に口数の少ない娘だった。だが、そこに強さがある。そう信じて、一行は先を急ぐのだった。

これから目指すは、 Gondwana 本域。グレールにこそ入らないものの、敵は警戒態勢を

強め、戦いもより苛烈なものになるだろうということは、傭兵団の全ての者達がわかっていた。

だが、だからこそおもしろい。この『ライル傭兵団』は、そんな奴らだった……。

さて、今日の朝陽は妙に明るくキラキラと光り、チェイスの城を輝かせていた。

出発する一行を、まるで天まで祝福しているようだった……………。

朝陽はまだ完全には上がらず、まるで夕陽のようだ。

だがどちらにせよ、あの太陽を見ていると勇気が湧いてくる。オレンジに似た、

明るい光が差し込むと、本来暗い山道もわくわくするほど明るくなり、昨晚積もりに積もった

雪はみるみる溶けてゆく。馬を走らせる一行は、これからの旅路に希望を持って馬に鞭を入れた。

だが、疲れた団長のこぼれた笑顔を歪ませる少年がいた。

「おいー。ベグオン！　いつんなったらつくんだよ？」

もちろんおわかりだろう。この少年。団長の心部下知らずと言わんばかりのシンだ。

長い交渉と戦でお疲れの団長ベグオンが折角笑みをこぼしていたのに、まったく興ざめな男だ。

「む……、うるせーな。パンゲア最北から南の国まで行くんだ。猛スピードで馬走らせても

何日もかかるっつーの！」

いらつときたベグオンは珍しく怒声をあげる。いやまあこの前もあげたが、いつもは冷静だ。

「えー、何日ぐらい？」

「さーな」

子供みたいな声を出すシン。ベグオンは軽ーくあしらう。

だが尚も時間においてはまだかまだかと声を出すホントに子供のような子供のシンに、

かなり冷静で適当に対処する団長さん。こういうのには慣れている

のだろう。

見かねたジェイクがいつものように横から声をかける。

「おいシン、いい加減にしろって。まだかつて聞いて、早くつくと思うか？」

「そりゃあそーだけだよ」

シンは我慢できねーんだよと言おうとして止めた。

確かに子供っぽいかなと思って今更恥ずかしくなったのだ。以外に年頃の少年だ。

だがそわそわするのにかわりはない。そわそわそわそわうつとおし。シンの真後ろの

グルイドは指摘するが、「はいよー」と言っただけで少し休んではまたそわそわ。よほど落ち着きのない少年だ。手間がかかる。

（大丈夫かなこれで……）

ベグオンは少し、不安を感じ始めてしまっていた。

ここで初めて、最後尾のニーシャがくすつと笑ったのだった。

第十七章：妖しい夜

馬を歩かせ続け、もう何日経っただろう。

陽が沈み、闇が押し寄せる。その度に野宿か、近くに宿があれば借りる。

だが、宿のある確立はかなり少なく、普段あるものもない不便な生活をおくる一行。

シンのわめきの勢いも増すばかり。まあ、大きな争いになるわけでもないが、

これでは余計疲れる。いい加減にせいと、ジェイクやグルイドあたりから非難がくるがいつまで経ってもやめはしない。

そんな、ある夜のことだった。

「今夜は、ここで寝ることになるな……」

ベグオンが呟いた目の先には、ボロボロな古ぼけた砦が二軒ほど並んでいた。

両方とも、雨か何かの影響だろうか屋根が崩れ落ち、壁にも穴だらけだ。

シンが右手を高く上げ、「また？」と団長に問う。「また」と軽く返す。

「え~~~~~~~~!!」

また駄々をこねだした。いらつときたベグオンはキツク言う。

「えーじゃない！ お前はどこのおぼっちゃんだ！ こんなでも、寝床があるだけ我慢しろ！」

「俺は山育ちだけど、屋根くらいあったさ」

そう吐き捨てる、シンはゆっくり馬を歩かせ砦の直前で降りた。愛馬の顔を撫で、

その辺の壁の穴から紐を通して繋ぐとさつさと中へ入っていった。一番乗りだ。

はあ〜と溜息をつくお疲れ気味の団長に、ニーシャがさつと声をかける。

「大変……ですね」

あ？ と振り向き、びっくりしたように後ずさりしたベグオンはその焦りを隠し返した。

「え？ あ、ああ。悪い奴じゃないんだがな」

「違いますよ」

そう言い残すとニーシャはシンに続き、さつさと馬を歩かせて砦の前に止め、

中に入ってしまった。

ベグオンは首を傾げながらもそれに続き馬をゆっくり歩かせる。数歩ゆくと、

砦の中から声が聞こえた。

「なあーベグオン、こんな狭いとこじゃ皆寝れないぜ」

皆の中では、天井もなく穴だらけの癖に妙に響く声だ。丁度ニーシヤが入ってきたくらいところでシンの声が聞こえてきた。

「別に……全員寝るわけじゃないわ」
「は？」

急に背後に現れたニーシヤの姿に驚きを隠せず、いや、隠さずにシンはぴょんと後ろに跳ねる。ニーシヤの方に体を向けたまま顔と目をキョロキョロと忙しそくに動かし、かなり動揺しているようだ。

「ど、どういう意味だよ？」

シンが慌てながら訊く。ニーシヤは、無表情のまま答える。

「見張りがつくもの……。外に……兵の半分が立ち、中で寝ている兵残り半分と……交代」

「ああ、成程」

声が小さいうえに飛ばし飛ばしだったが、言いたいことはよくわかった。

そのあとベグオンが入ってくる。

「そういうこった。後は兵と一緒に見張る傭兵団員が二人必要だが……」

ベグオンはそういいかけると、辺りを見回した。ベグオンにつられ

て入ってきた傭兵団の

メンバーから、それに相応しい者を探しているのだろう。

シンは不審に思う。いや、ベグオンの動きとかではない。

団長であり、かなりの実力者のベグオンが砦に入ってくるとき、シンはちゃんと少し前に
気配を感じ取った。

だが、ニーシャには感じなかった。

シンもそれなりに実力がある。ベグオンの気配を感じ取れたのがその証拠。

だが、何故かニーシャだけは感じられない。何故？

おの娘になにか不信感を持ちながらも、シンはさっきまで聞いていなかったベグオンの話に
耳を傾けた。

「誰かいないかな……。見張るに相応しい団員は……」

その時、シンの眉毛がピクツと動いた。今まで聞いていなかっただけに、急にそんな話を
聞かされて本当にピクツときたのだ。

「俺！俺がやる！」

そこで、気がついたときにすぐ手を上げた。

第十八章：悪ガキ 困らせる

「お前があ？ 無理だ」

ちよつと焦つたような表情で、ベグオンが大袈裟に言う。

シンは絶対大丈夫と思っていたので、「なんでだよ！」とベグオンの周りを凄く速さで

回り続け、時折素手で攻撃した。しかも、素手でも速い。しかしベグオンは腕だけ素早く動かしてことごとく止める。

「なんでもなにも、お前みたいに落ち着きのない奴じゃ見張りは無理！」

「大丈夫だつて」

つかまれた右手をもう片手ではずそうと一人奮起すると、更にベグオンは自分の方に引き寄せてきた。そして、シンの肩をポンと叩き言う。

「大丈夫じゃねえ、夜の見張りは危険。俺らも一人で寝てるなら人が近寄りや気づく。

だが眠る時、すでに沢山の人間が周りにいる。かなり気配と殺意を隠すのが上手いような

奴が相手なら、殺られる危険もある」

「だから俺が見張ればいいじゃねえか」

シンは随分と自身ありげに言い放つ。右手を痛そうに左手で撫で、ブラブラしている。

体の大きいベグオンに肩を組まれ、親子のようだ。

「もしそついう奴が相手なら、常に双眼鏡で遠くを見ておく必要がある。」

お前はそれをサボりそうだからダメだ！」

ベグオンがそれだけ言つと、シンは「ちえ、ケチ」と言い残して、後からゾロゾロ入ってきた
皆の方にふてくされて歩いていった。

「つーわけで、他に誰かいらないか？」

さつきまで騒がしかった皆内は、その一言で一斉に静まり返った。
誰も、名乗り出る者はいない。残念。

ベグオンが信じられないような呆れ顔で目の前の光景を見回していると、

なにやら後ろでニヤニヤと笑う男の気配を感じた。これはあくまでベグオンの勘だが、

今その男は自分を指差して笑いを堪えているだろう。きっと頬を膨らませ、

顔を真っ赤にして、余った手で口を抑えているだろう。ベグオンは、その勘が当たっているか

否かとばかりにゆっくり振り向いた。

案の定、当たっていた。ベグオンの勘をそっくりそのまま、シンが映し出していた。

ハァ。と、大きな溜息を漏らし、遂に笑いを堪えきれずに大声をあげるシンの方から目をそむけた。

第十九章：命がけの投刀

本当に悪戯好きな子だ。傭兵団のメンバーにヒソヒソと声をかけてまわり、

自分を見張りにしてもらるようにした。皆が所々笑っているの、わかる。

もはやこれは「裏取引」という奴だ。だが皆、「いいじゃねーか」という感じでヘラヘラ

笑っている。シンを夜中の見張りにするのは、ベグオンにしては心配でしようがない。

そこでとっさにベグオンは、いいことを思いついた。

「そうだ、シン。俺と一緒に飲み水と食料の調達に行こう」

「は？　そういうのって一般兵の係りがやるものじゃ……」

シンは反論するが、軍のことについてはよく知らない。なので、シンはこういう手を使われると勝てない。

「いーんだよ、たまには。行くぞ」

ゴリ押しするベグオンに、ギャーギャー言いながらも渋々ついていく羽目になったシン。

いや、正確に言えば「引きずられて」いった。

「武器は持ってかせるよ」
「どーぞ」

こうして二人は、軍を離れ、暗闇へと歩いていった。手には竿に大きめの容器。背中に槍と大刀。それと弓。きつと動物でも狩るつもりだろう。竿は釣りに使う気だ。

それにしてもこの辺に川などあっただろうか。シンが訊いてみると、「念のため」と言っただけで、そのまま歩いていった。

「敵襲です！」

ハロンが声をあげた。もう夜中で、砦の中で見張りじゃない多くの兵が眠りに就こうとしていたときだ。

皆わっと驚き、だがすぐに落ち着いて鎧を身に着ける。見張りたちにいる外では、もう戦いが始まっていた。

外からは、見張りのケイトやハロンの武器を振り回す気合の声が聞こえる。

砦の中から出てきた戦士達は、口々にある男の名を口にする。そう、まだベグオンが帰ってきていないのだ。勿論シンもだ。

「団長なら大丈夫！ あの人、これしきの軍勢に負けるはずがない！」

「シンもついてるしな」

いつの間にかハロンの隣にいたおなじみジェイクが呟く。少しはシンの事も信用してきた

らしい。だが、最後に小言を呟く。

「ま、夜の森はあいつの苦手分野だが……」

一方、暗闇で道に迷って襲われた二人だ。

「うらぁ！」

ベグオンの怒声が夜空に響き、同時に血しぶきが空を赤く染めた。そのたびに兵の悲鳴が鳴り、ユラユラと大地は揺れる。

シンの槍も負けてはいない。振るたびに轟音がなり、うかつに近寄れずに立ちすくむ兵は

いつの間にか手足の筋を切られ、武器を落とす。

「なんという技……」

やられた兵は必ず驚愕の声をあげて倒れていった。シンの攻撃で死んだのではない。

倒れたあとに、踏まれ蹴られ戦の巻き添えをうけ死んでいった。

その時、戦う二人の背後からドタドタと走るような音が響いてきた。その音にはっと気づいた二人は、さっと側転して身をかわす。

後ろから二人を目掛けて走ってきたのは沢山の騎馬兵。兵の流れに流されそうになったが、

なんとか体勢を立て直して走りながら二人は戦い続けていた。

途中木の陰に隠れ、突き、斬り、敵を蹴散らしていく。だが、次から次へと一般兵が流れこんできた。

「本当、二人じゃ拉致があかねえ！」

ベグオンが叫ぶ。ととつさに、背後の何者かとぶつかった。

「俺も同感だ」

シンが背中越しに言う。こっちは何故か傷だらけだ。さすがのシンでも、この大群が相手だ。
ボロボロで息が切れるのも無理はない。

「誰か加勢に来てくれれば楽なんだがな」
「いけねーよ。団長が部下に頼ってちゃ！」

どうやらシンは不機嫌のようで、目の前に現れた敵を間髪入れずに切り刻んでいった。
ベグオンはそつちをチラツと見る。

「俺より重症の癖に、よく言っぜ！」

ベグオンはそう怒鳴ると、シンに当たりそうでちょっと危ないくらいのところにもで
大刀を振る。そのたんびに体中に風を感じ、傷口に爽やかにしみわたって気持ちがいい。

そこからだんだん離れていき、二人はまたバラバラに戦い出す。
だがボロボロで疲れきったシンは見るだけでも危なっかしく、ハラハラする。

疲れが蓄積し、一瞬シンの動きがピタツと止まった時だ。

「危なっ……」

弓を構える暇はない。敵はシンの後ろから迫ってきて、今正に刀を、シンの背中に振り下ろそうとしている。

ベグオンはとつさに、己の武器を投げた。

飛んできた大刀は、凄い力で投げられたらしく、ブンブン回りながらシンの背後の敵に命中した。

シンはハッとそれに気づき、後ろに振り向く。敵はもう死に、崩れていったが、

その向こうで戦っているベグオンが心配だ。なんせ自分の武器を投げてしまったのだから、

今は武器がないはず。いくらベグオンでも、武器なしじゃこの軍勢に勝ち目はない。

シンは落ちた大刀を拾い、掛け声をあげながら走り出したその時だ。シンの眼差しの先から、ベグオンの叫び声が聞こえたのは。

第二十章：虎へのサイン

ベグオン！

ポツポツと雨が降り注ぐ中、誰かの声が、ただ同じ言葉を繰り返している。

ベグオン！ 大丈夫かあ……、今いくぞ！

（ベグオン？ ……俺のことか）

彼、薄れ行く意識の中で、たったひとつの声だけがハッキリと耳の奥に響き渡ってきた。

視界に映るのは、鮮やかに紅色に染まる血と、誰かの腕がブンブン振り回されているだけ。

景色もめまぐるしく変わっていく。自分が回っているのか、世界が回っているのかもわからないほど感覚がない。

（え……、まさか……俺は、死んだのか！？）

ベグオンはそう考えてみた。だがまずは落ち着く。

感覚は戻りつつあった。自分では死んだと思い込んでいた。

視界ももっとハッキリした。誰のものは知らないが、振り回される腕の先に、強く握り締められた棒がちゃんと見えた。

（……サオ？ ……わかった。これ、俺の腕だ）

ベグオンが気づいた時、既にシンは目前まで迫り、サオの当たる間合いの一手手前まで詰め寄り、今正に大声を張り上げようとしている。

たところだ。

「ベグ……」

それにとつさに気づいたベグオンは、必死にそれを押さえる。
シンは後ずさり、ベグオンに投げかけた。

「どうして返事しねーんだよ！」

そんな事を言われてもベグオンにはよく意味がわからない。
そこで彼は、素早く状況を飲み込みとつさに答える。

「わ、わりいわりい！ 意識とんでたもんだから……」

「はあ？ サオで大立ち回って、まだ無傷の癖によく言っぜ」

シンに言われたとき、ベグオンはやっと状況を完全に飲み込んだ。

（俺が無意識にサオ振り回して無傷……。わかったぞ。つまり、俺が刀投げてやられたと思い込み、意識は一瞬とんだが、それでも体が勝手に動いたと……）

そこまで考えてみると不思議になり、自分の手に持つ血まみれのサオを眺める。

（サオ持ってきてよかったぜ。川がなくても見つけるまで帰らない覚悟だったからな。やっぱ、諦めなくてよかったぜ！）

ベグオンが考えているうちに、敵はすぐそこまで迫ってきた。
だが、ことごとく返り討ちにし、物凄いサオ捌きで数多の敵をなぎ払った。さすがにサオでは

敵兵を殺すまでには至らないが、それでも構わない。虎のごとき暴れぶり、兵を獲物のように狩る。

「なあ、ベグオン！」

「なんだ！？」

急にシンが話しかけてきた。

「ありがとなー！」

「……おう！」

思わぬシンからの礼の言葉に、呆気にとられそうになったベグオンだが持ちこたえる。

そして元気に返事を返す。この男の、あるべき姿だった。

「お前の刀……、持つてくることはできなかった！ すまん！」

シンが怒鳴る。もちろん体は動きっぱなしだ。

ベグオンは黙ってサオを打ち続けるが、それを放ってシンは一瞬手を止め、ベグオンより少し奥の方を指差した。

「お前、意識なくてもかなり動いてたからな。お前の後ろに、刀はあるぜ！」

「……おうー！」

ベグオンは更に勢いをつけてサオを振りだした。

（あそこだ……。あと十メートルくらいか。あれさえ取れば……！）
「邪魔だ——……」

暴れ狂う虎が、大きく怒鳴って大地を揺らしかけた時だった。彼の頭に、ある映像が流れ込んできた。

——父ちゃん！

——元気出してくれ、父ちゃん！

第二十一章：闇のトラウマ

「父ちゃん、こんな天気で釣り？」

それは少し雲行きの悪い日の夜だった。真っ直ぐな道を歩き続ける少年は、隣を歩く父親らしき人物に問いかける。

「たりめーよ。今日釣らなかつたら、一週間飯ぬきだぞ」
「それはやだよ」

会話をひとまず終え、ただただ真っ直ぐ、歩く。

何か胸騒ぎがした。胸の下みぞおちの奥の方からドクドクとこみ上げてくる不安な気持ちのやり場がわからず、少年は落ち着きなく左右へブラブラ動き回る。父は、どーした、と訊く。

「なーんか不安」

少年がそう言っても、父はただ大丈夫、とひと言言って歩き続けた。少年もそれにしたがって、せっせと歩く。

「雨など怖くない。何故なら、それは自然。自然とは、人間の本来居るべき場だからだ」

自身ありげに、父は語ってみせる。少年は意味が全然わからなかったようで、適当にふーんと納得したフリをした。それからしばらく歩き続けると、目の前の川に突き当たった。

「ついたぞ」

「うん」

そうひと言ずつ言葉を交わすと、親子はすぐに持っていた釣竿を構え、糸を海に投げた。父はすぐに川魚がひっかかり、引くと釣れた。少年の方はなかなかこない。いつまで待っても、こない。魚は、子供に興味がないのだろうか？　なんて、少年は思う。その間に、魚にえさを取られてしまったのに気づいたのは約五分後のことだ。

「あ、取られてた」

少年の呟きに、父は素早く振り返る。

「はあ？　お前、一匹も釣らねえ間にえさ一つなくしたってか。こつちあもう十匹は釣ってる。えさなんて残ってねえぞ？」

「嘘！」

少年は、ヤバッ、という表情を浮かべた。それを見て父は、やれやれと首を振り、しょうがないから取ってくる、と言って、来た道を走って行った。

「そこで待つとけよ！」

父は走りながら息子に向かって叫ぶ。息子が確かに頷くのを確認したら、また猛スピードで走っていった。

暇になった少年は、とりあえず寝た。しかし、胸騒ぎがどうしても収まらない。落ち着いて眠れやしない。何度も起きては寝て、起きては寝てを繰り返した。最後に少年が起き上がり、はあっ、と溜息をついた時だった。

何かを感じた。背後の茂みから、沢山の人間の気配がする。研ぎ澄まされた直観力で、沢山の人間の気配を察知し、気づいていないフリをして油断を誘った。背後の茂みから大勢で忍び寄るなど、賊に違いないと少年は確信したのだ。案の定だった。

急に茂みから飛んできたのは石斧だった。わざと敵に背中を向けていた少年だったが、物凄い直感で斧から身をかわす。

「ちっ！ 惜しかったぜ！」

茂みから一人の山賊らしき男が飛び出てきた。それに誘われるように、沢山の仲間たちが次々現れて、少年を囲む。少年はすぐに武器を構え…… ようと思ったが、武器など持っていない。それに気づいたのが遅かった。腰に手をかけ、自分の愛刀がないことに気づき軽いリアクションをとった隙に、やられた。

だが惜しかった。少年はまたも身を翻し、敵の剣は肩にかすっただけで済み、致命傷にこそならなかったものの、かなり出血した。このままでは、この浅めの傷で死んでしまう。その上武器もなく、沢山の山賊に囲まれたこの最悪な状況下で少年の体力が切れ、膝をガクンと落とした時だった。

「ベグオン！ 大丈夫かあ！」

父が急いで帰ってきた。だが勿論、武器など持っておらず、山賊に立ち向かうことなどできない。そう思っただけで諦めかけたベグオンが、目を閉じようとしたときだ。

父の気合の声が響いた。それに続き、山賊の悲鳴が鈍く飛び交った。

ベグオンは、目を開けた。見れば己の父が、己を守らんと必死に、

サオで戦っている。だんだん雨が降ってきた。山賊のリーダーらしき男が合図をすると、そこらじゅうの茂みや木の陰などから大量の山賊が流れ込んできた。こんな山奥に釣りをしにきたのが失敗だった。

戦い続け、父はひとまず息子のもとへ駆け寄る。

「出血しすぎだ！ 大丈夫か！」

父は自分の服をひきちぎり、それを息子の肩に巻いて止血した。だが、その間に山賊の石斧が背中に直撃した。

それで、一瞬静かになった。賊たちも、これで強敵は死んだと思って笑みを浮かべる。

だが、虎の父は再び雄たけびをあげた。そして暴れ狂い、敵から奪い取った斧とサオを両手に握って戦い続けた。だが、背中が痛む。傷口が開き、大出血だ。

自分の体力もこれ以上もたないと判断した父は、武器を捨てた。敵の攻撃をかわし、息子をおぶり逃げた。それから、全速力で一時間は走り続けた。

ベグオンが目を覚ました時だ。父親の大きな体は倒れ、体中から血が流れていた。矢を何発も喰らっていた。

その時、やっと意識と記憶がつながったのか、ハッとしたように、倒れる父にしがみついた。

「父ちゃん！」

いくら叫んでも、父は起きなかった。もはや息はせず、その鼓動を感じることではできなかった。

「父ちゃん……、起きてくれよお……………」

広い森の奥で、どしゃぶりに体中を濡らされながら、少年の鳴き声だけが雨音よりも大きく聞こえた。

第二十二章：今を戦う

「うわぁー！ー！ー！ー！！！」

ベグオンは我にかえり、声をあげた。しかし、今度のは雄たけびではなく、悲鳴のようだった。

「どうしたベグ……」

シンは言いかけるが、敵の猛攻の合間にそんな暇はない。

暗い空、森、そして竿で戦う戦士。ベグオンの記憶が呼び戻された時、彼の膝は落ちた。

「ベグオン！」

シンは急いでベグオンに駆け寄り、かばうように戦った。

「しっかりしろよ、おい！」

しかし、シンの声は届かなかった。幼き日のトラウマは、恐ろしい。ベグオンの目は怯え、立とうにも立てない。

竿を地に着け、必死に立ち上がるうとするも無理。竿はベキンと折れる。

「な……なんだよ。コノヤロー、なんで立てねえ」

ベグオンが唸るように言う。そしてまた、大きく悲鳴をあげた。

シンが一旦武器を止め、手をかす。しかしベグオンはそれを振り払い、あとずさる。幸いそこに敵はいなかったものの、木にぶつかり、その木には矢が沢山刺さっていた。

「矢……」

またも記憶が甦る。父は最期、矢を体中に撃たれて死んだ。この木のように。

「うわぁぁぁぁぁぁぁ」

また叫ぶ。

「ベグオン、お前の隣にあるだろ！ 武器が！」

シンの指差したところには、あった。今は猫と化した、虎の大刀が。あとずさってるうちに、もう武器のもとまできていた。

「取れ！ お前は今を戦ってるんだろ！」

シンが叫ぶ。猫はハツとした。叫びながら武器を取り、ゆっくり立ち上がった。しかしまだ、体は震えている。

それでも彼の眼は、もう猫ではない。

「そうだ……。負けられるかあ！」

やっと気合が入った。だが、それは遅すぎた。もう残り少ない敵兵に囲まれ、その兵たちはもう隙だらけのベグオンに狙いを定め、一斉に武器を振り下ろしていた。

——ヤベエ

「ばあーか」

そこで、助けが入った。

「一斉に振り下ろしなんかしたら、結構簡単に受けられるぜ？」

シンは上に槍を構え、全てを受けた。そして、ベグオンを避けて一回転。周りの敵をなぎ払った。

「やるぞ」

「……おう！」

再び暴れだしたベグオンは先程より勢いを増し、残り少なかった歩兵を殲滅した。シンは、騎馬兵達相手に一步も退かず、約十騎いた騎馬たちを全員落馬させた。木に登り、草の陰から狙い打つ。このパターンを、父から深く教わっていた。

全滅。二人は、背中合わせに座って休んだ。

少しして、ベグオンが口を開いた。

「なんで知ってた。俺のトラウマ」

「暇つぶしだよ」

「意味わかんねーよ」

その頃、他の団員や兵たちのいる砦。

もう戦闘は終わっていた。戦死者0名。見事な完全勝利だった。勝利をかみ締め、半分はまた砦に戻った。ジェイクも砦に戻ろうとしたが、その前に、馬のひづめの音が聞こえ、立ち止まる。

「ハロン。どうだった？」

「は！ 団長とシンを発見いたしました」

ハロンの乗っている大きな馬は、三人ぐらい軽く乗る大きさだ。ハロンの後ろには、二人が乗っていた。

「おかえり、二人とも。怪我は？」

ジェイクは確認し、たいした怪我がないことがわかりホッとする。

「で、どうだった？ ベグオンは」

ジェイクは、コッソリシンに訊く。

「見事に打ち勝ってたぞ、トラウマとかいうのに」

「そーか、そりゃよかった」

「それよりさ、あのトラウマの話は聞いたけど、セリフについてまだ聞いてねえ」

「あ？ ああ……、それはな」

言いかけて、やめた。

「いや、それはまた今度な」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8310d/>

大陸の覇者

2011年1月3日21時23分発行